Ⅰテサロニケ１章１節「恵みと平安」

１．テサロニケ教会の誕生

1章1節は手紙の挨拶の部分です。皆さんは手紙の書き出しはどのような文章で始められるでしょうか。一般的には季節の挨拶があるでしょう。クリスチャンの場合は「主の御名を賛美します」と書き始める方もおられるでしょう。パウロの手紙の挨拶は、発信人、受信人、恵みと平安を祈る3つの要素が入っています。最初の【パウロ、シルワノ、テモテから、】はこの手紙の発信人です。3人の名前が挙げられていますが、実際にこの手紙を書いたのはパウロです。けれどもシルワノとテモテもパウロの同労者として、テサロニケ教会の誕生と牧会に関わりました。シルワノはシラスの正式名です。使徒17章を見ると、テサロニケ教会の誕生の出来事が記されています。第1の点ではテサロニケ教会の誕生とこの手紙が書かれたいきさつを見てみましょう。

パウロは第2次伝道旅行の際に、シラスを同行させました。リステラではテモテも一行に加わります。またトロアスではルカも加わりました。パウロはトロアスで「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください」というマケドニア人の叫びの幻を見ました。マケドニアは現在のギリシアの北部です。一行はヨーロッパにも福音を伝えることが神のみこころであると悟り、船でマケドニアに渡りました。そして最初に伝道したのがピリピでした。ピリピでは最初から迫害に会い、パウロとシラスはむち打たれ牢に入れられますが、紫布の商人リディアと彼女の家族、また看守と彼の家族が救われ、ピリピ教会の初穂となりました。

次に彼らが向かったのがテサロニケです。テサロニケは現在もギリシア第2の都市ですが、当時もマケドニア州の州都で交通の要所として大変にぎわっていました。テサロニケにはユダヤ人が多く住んでおり、ユダヤ教の会堂がありました。パウロは3回の安息日に渡って、聖書からイエスの死と復活を宣べ伝え、イエスこそ救い主だと説明しました。その結果、多くの神を敬うギリシア人と有力な婦人たちがイエスを救い主と信じました。このパウロの伝道でイエスを信じた人たちによってテサロニケ教会が誕生しました。ところがユダヤ人たちはねたみにかられ、暴動を起こし、パウロとシラスを探しました。そこで、テサロニケの兄弟たちは夜のうちに二人をベレヤに送ったのです。

パウロはその後、アテネとコリントに行き、コリントでは1年半腰を据えて伝道しました。同時にパウロはテサロニケ教会のことを案じていました。本来ならもう少し滞在して、生まれたばかりの教会に必要なことを伝え、兄弟姉妹を励ましたかったのです。パウロは再びテサロニケを訪問しようとしましたが、道が開けませんでした。そこでパウロはアテネからテモテをテサロニケに遣わし、テモテによって信仰の励ましを与えることにしました。そして、テモテが奉仕を終え、アテネのパウロのところに良い知らせを持って戻ってきました。3:6をお読みします。【ところが今、テモテがあなたがたのところから私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせを伝えてくれました。また、あなたがたが私たちのことを、いつも好意をもって思い起こし、私たちがあなたがたに会いたいと思っているように、あなたがたも私たちに会いたがっていることを知らせてくれました。】

パウロはテサロニケ教会が迫害の中でも信仰を守り、愛のわざに励んでいることを知り感謝しました。同時にテモテの報告を聞いて、さらに伝える必要があることを手紙に書いて送りました。その手紙がテサロニケ人への第一と第二の手紙です。二つの手紙は紀元51年頃に、数が月の間隔を置いて書かれています。イエスが昇天されてから20年後のことで、パウロの手紙の中でも初期のものです。テサロニケ人への手紙第一は、クリスチャンの日々の生活への励ましと、キリストの再臨と復活についての正しい知識を教えています。これから、私たちもこの手紙を通して神のことばを学んでいきましょう。

２．教会とは何か

次の挨拶文には手紙の受信人が記されています。【父なる神と主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会へ。】この短い文章の中に、教会とは何かを知ることができます。まず「教会」という言葉はギリシャ語ではエクレシアと言います。これは「呼び出す」という意味の言葉です。神が私たち一人ひとりを呼び出して教会の交わりに加えてくださったのです。テサロニケには当時も様々な集まりがあったことでしょう。それらの集まりは同業者の集まりや特別な資格を持つ者の集まりなど、人間同士のつながりや取り決めで集う集まりでした。けれども教会は違います。教会は集う者同士が一緒に集まりましょうと言って集まった群れではありません。そうではなく、教会は一人ひとりが神から呼び出され、神に招かれて、神の民の一員に加えられた結果、集められた群れなのです。

さらに教会は「父なる神と主イエス・キリストにある教会」です。「ある」とは英語ではin、「中にある」という意味です。テサロニケの教会はテサロニケという町の中にありました。彼らはテサロニケの住民でしたので、テサロニケ人と呼ばれました。と同時に、テサロニケ教会は父なる神と主イエス・キリストの中にありました。その意味は、教会は神とキリストの支配の中、救いの中、祝福の中にあるということです。教会はこの世のただ中にありながら、同時に神の国の中にあるのです。神の国の「国」は「支配」という意味です。テサロニケ教会はこの世の中にありつつ、この世の支配ではなく、神の支配の中にあったのです。また父なる神と主イエス・キリストが並列的に書かれているのにも理由があります。それはイエスは十字架で罪の贖いを成し遂げ、よみがえって天に昇り、今神の右の座に着いておられるからです。救いを成し遂げられた神の御子イエスは、父なる神と同じように主と呼ばれるにふさわしいお方なのです。私たちはイエスを主と信じることによって救われます。教会はイエスを主と呼ぶ群れです。主イエス・キリストとは私たちの信仰告白です。イエスを主と信じる者は、主イエスの救いの中に入れられるのです。このように、短い受信人の言葉に教会とは何かが記されています。

私たちの属する波崎キリスト教会も同じです。私たち一人ひとりは神に呼び出されイエスを主と信じて教会の交わりに加えられました。教会も私たちも父なる神と主イエス・キリストの中にいます。この世にありつつ同時に神の国の中にいます。私たちは神の支配、救い、祝福の中にいるのです。このことを覚えるなら私たちは教会の一員とされていることの幸いを覚えて生きることができるでしょう。波崎キリスト教会は、父なる神と主イエス・キリストの中にある教会であることを覚えつつ、この地における教会の務めを果たしましょう。

３．祈りのことば

最後の挨拶はパウロの祈りです。【恵みと平安があなたがたにありますように。】パウロは他の手紙においても、初めに恵みと平安を祈ります。そしてこれは単なるお決まりの挨拶文ではなく、パウロの心からの祈りです。「あなたがた」即ちテサロニケの兄弟姉妹と教会を覚え、恵みと平安を心から祈っています。いつも恵みが最初で次に平安の順序です。ここにも意味があります。まず恵みから見てみましょう。へブル書13章では、恵みはキリストの十字架という一つの祭壇から出ていることを学びました。恵みは神が私たちに与えてくださった救いです。恵みは私たちが受ける当然の報いではなく、むしろ受けるに値しない者に対する一方的な神からの賜物、プレゼントです。

神に敵対していた私たちは、本来神の救いを受けるにふさわしくありませんでした。私たちは言ってみれば、イエスを十字架に付けろと叫んでいた群衆や、十字架に付けたローマ兵や、十字架上のイエスを嘲った人々の側にいたのです。それなのに神は私たちを愛し、私たちを救うために神のひとり子イエスを十字架に付け、私たちの身代わりにイエスをさばかれました。そしてイエスは、十字架の苦しみの中で私たちのために祈られました。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」そして、私たちの身代わりとなって死んでくださいました。そしてイエスを主、救い主と信じるだけですべての罪が赦される救いを成し遂げてくださったのです。この救いが恵みです。

さらに、この十字架の救いをいただいた者が、生涯信仰者として生きるために必要な知恵や力や助けも神の恵みとして与えられます。私たちは今日も神の恵みをいただいて生きています。受けるに値しない者にあふれるばかり与えてくださる神の恵みによって生かされている。なんとすばらしいことでしょうか。この世にあってクリスチャンが信仰生活を全うするためには神の恵みが必要です。だからこそ、恵みがありますようにとパウロは祈りました。私たちも自分のためにも兄弟姉妹のためにも神の恵みを祈りましょう。

もう一つは平安です。平安と平和はギリシャ語では同じ言葉です。平安や平和は神の恵みをいただく者の心に与えられます。イエスを救い主と信じて、すべての罪が赦され、神との親しい交わりの中に入れられる時、私たちは神との平和な関係を築きます。それまで神に敵対していた私たちが、キリストの十字架の贖いによって神と和解し、神との平和を持つのです。すると、私たちの心に平安が与えられます。よみがえられたイエスが弟子たちに最初に言われたのが「平安があなたがたにあるように」でした。イエスが十字架に付けられ、死んだ後、弟子たちの心には平安がなく、不安しかありませんでした。しかしイエスがよみがえられたことを知った弟子たちはイエスの下さる平安をいただいて、不安が吹き飛びました。私たちもイエスを信じて救われると心に平安が与えられます。この世に生きている限り、私たちは様々な出来事に直面し、時には悩んだり不安になることもあります。けれどもそのような私達の心に、今日もイエスは語っておられます。「平安があなたがたにあるように。わたしがあなたとともにいる。だから恐れてはならない」と。

さらに神のみこころは私たちが隣人との間に平和を築くことです。先週は77年目の終戦の日を迎えましたが、今もウクライナでの戦争は続き、ミャンマーでは軍が民衆を武力で弾圧しています。残念ながら人間の歴史は戦いの歴史でもあります。そのような中で、クリスチャンは平和をつくる人としてこの世に遣わされています。そのために必要なのはまず祈りです。パウロは迫害の中にあるテサロニケ教会に平安があるようにと祈りました。私たちも困難な中にある人たちのために平安があるようにと祈りましょう。そして自分にできることは何かを考えつつ、平和をつくる神の民としてこの世に遣わされましょう。

Ⅰテサロニケ１章２－４節「信仰、愛、望み」

１．感謝の祈り ２

パウロは1:1でテサロニケ人の教会への挨拶を記した後、2節で神への感謝を述べています。【私たちは、あなたがたのことを覚えて祈るとき、あなたがたすべてについて、いつも神に感謝しています。】パウロは第2次伝道旅行で、テサロニケで伝道した時、ユダヤ人の反対に会い、急にテサロニケを離れなければなりませんでした。けれども、その後もテサロニケ教会のために祈り続けました。そして、祈るたびに彼らのことを覚えて神に感謝しました。このパウロの祈りには２つの特徴があります。一つは神への感謝の祈りです。パウロはテサロニケ教会のために神にとりなし祈る中で感謝しました。通常とりなしの祈りは願い事が中心になるのではないでしょうか。けれどもパウロはとりなしの祈りの中でまず祈る人たちのことを覚えて、神に感謝をささげました。しかも「いつも神に感謝しています。」たまに感謝するのではなく、とりなしの祈りのたびに、神に感謝していたのです。このことは私たちのとりなしの祈りの中でも感謝をすることの大切さを教えられます。あの人のことを感謝します、この人のことを感謝しますと、いつも神に感謝することはとりなしの祈りにふさわしいのです。感謝の祈りから始める時、私たちの願いも神のみこころにかなうものとなることでしょう。

二つ目は感謝の対象です。パウロは何について感謝しているでしょうか。それは「あなたがたすべてについて」、テサロニケ教会のすべてについてです。もちろんテサロニケ教会は完全な教会ではありません。長所もあれば短所もあります。この手紙の中でも素晴らしい点と改めなければならない点が記されています。では「あなたがたすべて」とはどういうことでしょうか。それは「あなたがたを丸ごと」「あなたがたの存在すべて」ということです。個々の一つ一つというのではなく、「あなたがたをそっくりそのまま」ということです。先週1:1で「父なる神と主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会へ」の意味を学びました。テサロニケ教会は父なる神と主イエス・キリストの中にある教会です。即ち、彼らは救われた結果、神とキリストの支配の中、救いの中、祝福の中にあるのです。このすばらしい神の救いのみわざがテサロニケ教会に現わされていることを覚える時、まずなによりも主にある彼らを丸ごと感謝することが第一に出て来るのです。私たちも兄弟姉妹のことを覚える時、また諸教会を覚える時、彼らが神とキリストの支配、救い、祝福の中にあることを覚えて、心から感謝をささげましょう。

２．信仰、愛、望み ３

まず3節を見てみましょう。【私たちの父である神の御前に、あなたがたの信仰から出た働きと、愛から生まれた労苦、私たちの主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐を、絶えず思い起こしているからです。】ここには信仰、愛、望みというキリスト者の三つの徳が記されています。この三つの徳は他の箇所にも出てきます。一番有名なのはⅠコリント13:13です。【こういうわけで、いつまでも残るのは信仰と希望と愛、これら三つです。その中で一番すぐれているのは愛です。】今日の箇所では三つの徳だけでなく、それらが結ぶ実践的な実が記されています。即ち、「信仰から出た働き」「愛から生まれた労苦」「望みに支えられた忍耐」です。直訳は「信仰の働き」「愛の労苦」「望みの忍耐」です。こちらの方が覚えやすいですが、2017版は意味が解るように丁寧に訳しています。一つずつ見てみましょう。

まず「信仰から出た働き」「信仰の働き」です。「働き」とは「行い」とも訳される言葉です。ローマ書やガラテヤ書では信仰と行いは対立的に語られています。すなわち、「人は行いによってではなく、信仰によって義と認められる」という救いについての教えです。人が救われるのは律法を行うことによってではありません。ただイエス・キリストを信じる信仰によって義と認められて救われます。これは信仰義認の教えです。一方、信仰によって救われた人は、良い行いの実を結んでいくのです。これはキリスト者の成長、聖化の教えです。「信仰から出た働き」は救われた人が結ぶ行いについて教えています。信仰から出た働きは、信仰を土台とした働きです。クリスチャンの働き、行いは信仰を土台とし、信仰から出たものでなければなりません。信仰と全く関係ない働きであってはいけないのです。Ⅰコリント10:31「こういうわけで、あなたがたは食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」食べる時にも神に感謝して食べる時、食べる行為は信仰から出た行いとなります。クリスチャンは、神のみこころは何かを信仰によって考え、神の栄光のために行う時、「信仰から出た働き」をすることができます。テサロニケ教会は「信仰から出た働き」という実を結んでいたのです。

二つ目は「愛から生まれた労苦」「愛の労苦」です。テサロニケ教会は「愛から生まれた労苦」の実を結んでいました。愛はクリスチャンに与えられた御霊の実です。神を愛し、兄弟姉妹を愛し、隣人を愛することを神は私たちに願っておられます。愛は抽象的なものではなく、具体的な実を結ぶことによって、その人の愛が証明されます。祈りや賛美の中で「神様、あなたを愛します」と言うことはすばらしいことです。けれどもそこで終わってしまえば、私たちの神への愛は抽象的また感情的なものにとどまってしまいます。「愛から生まれた労苦」とあるように、神への愛から神への具体的な奉仕が生まれ、労苦して奉仕する時、神への愛の具体的な実を結ぶのです。「今日は奉仕をして疲れた」と感じるなら、その日は「愛から生まれた労苦」という実を結んだのです。また隣人への愛も同じです。良きサマリヤ人は、強盗に襲われた人を介抱し、宿屋に連れて行き、主人に費用を渡し、自分がいない間の介抱をお願いしました。そのようにして隣人を愛する行いをして「愛から生まれた労苦」の実を結びました。私たちも兄弟姉妹や隣人に対する具体的な愛の実を結ぶ者となりましょう。

三つ目は「望みに支えられた忍耐」「望みの忍耐」です。テサロニケ教会は「望みに支えられた忍耐」の実を結んでいました。へブル人への手紙の中でも、迫害下にある教会に対して、信仰の競争には忍耐が必要であることが教えられました。テサロニケ教会も誕生直後から、ユダヤ人による迫害が起こりました。そのような中で忍耐の実を結んでいたのです。この忍耐はじっと我慢することではなく、望みに支えられた忍耐でした。その望みは「私たちの主イエス・キリストに対する望み」です。具体的には主イエスが再び来られる再臨の望みです。キリストの再臨はこの手紙の中の主要テーマの一つです。主が再び来られ、クリスチャンが天に引き上げられる時どうなるでしょうか。4:17ｂ「こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」この望みです。新天新地でいつまでも主とともにいることになるという望みに支えられて、今この世での試練を忍耐をもって耐え忍ぶことができるのです。私たちも同じです。この世の生活では様々な困難に遭遇することがあります。けれども、私たちには主の再臨の時に永遠の御国で主とともに過ごすという確かな希望、確かな望みがあります。その信仰の競争のゴールを覚える時、地上での信仰の競争を忍耐をもって走り続けることができるのです。

３．神の愛と選び ４

テサロニケ教会の兄弟姉妹がこれらの三つの徳とそこから出た行いの実を結ぶことができたのは、彼らが自分の力で努力したからではありません。そうではなく、神の救いの恵みによって行うことができたのです。第3の点では彼らの救いの2つの土台を見てみましょう。【神に愛されている兄弟たち。私たちは、あなたがたが神に選ばれていることを知っています。】まず一つ目の救いの土台は神の愛です。「神に愛されている兄弟たち」とパウロは呼びかけています。「兄弟たち」という聖書の呼びかけには、主にある兄弟だけでなく、主にある姉妹も含まれています。そして彼らは神に愛されている人たちなのです。私たちの救いの出発点は私たちへの神の愛です。

Ⅰヨハネ4:10「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」私たちは、以前は神を知らず、神を愛することなく、むしろ神に敵対し、神に背を向けて自分勝手に生きていました。この神への不信仰が聖書のいう根本的な罪なのです。そのような神の敵として歩む私たちを神が愛して下さらなければ、私たちは決して救われませんでした。しかし、感謝なことに神は私たちを愛してくださり、私たちを救うために、愛するひとり子イエスを私たちの罪のために宥めのささげ物として、十字架でささげて下さったのです。その結果、私たちの罪の贖いが完全に成し遂げられ、救いの道が開かれました。私たちも聖書を通して神の愛を知り、神の愛の賜物であるイエスを救い主と信じた時から、「神に愛されている兄弟姉妹」と呼ばれるようになりました。私たちの救いの土台には神の愛があることを覚えて、心から神に感謝しましょう。

二つ目の救いの土台は神の選びです。【私たちは、あなたがたが神に選ばれていることを知っています】とパウロは言いました。私たちが救われるために必要なのは、イエスを主と信じる信仰です。神は私たちに自由意思を与えられたので、自分の意思で信じたり、信じなかったりできます。そして、神の愛を信じ、イエスの十字架の救いを信じる時に、私たちのすべての罪が赦されて、救われるのです。いわゆるカルトと呼ばれる宗教は、マインドコントロール、洗脳によって、自由意思が働かない状態で信じるようにします。しかし、それは本当の信仰ではありません。

さて、私たちが自分の意思でイエスを救い主と信じる時、神の側ではもう一つのことが行われていたのです。それが神の選びです。よく言われることですが、天国の門の表側には「主イエスを信じなさい。そうすれば救われます」(使徒16:31)と書いてあります。そしてイエスを信じて天国の門をくぐって後ろを見ると、門の裏側には「あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました」(ヨハネ15:16)と書いてあるのです。この神の選びは私たちの理解をはるかに超えた神の主権の出来事です。私たちはだれが神に選ばれているのかは分かりませんし、そのようなことを考える必要もありません。自分がイエスを信じた時、その背後にイエスが私を選んでくださっていたことを知るのです。この神の選びは私たちの救いの確信となります。自分が信仰によって神の手を握っているだけでは不安になりますが、神が選びによって私たちの手を握っておられるので、救いは確かなのです。私たちも神に愛され、神に選ばれている。この救いの土台を覚える時、私たちは救いの確信をもって神の栄光のために歩むことができます。救いの喜びに満たされて、信仰の働き、愛の労苦、望みの忍耐の実を結びましょう。

Ⅰテサロニケ１章５－７節「私たちの福音」

１．私たちの福音 ５a

今日の箇所は、福音を伝える人と福音を受け入れる人のことが記されています。第1の点では福音を伝える人について、第2、第3の点では福音を受け入れる人について見ていきます。まず福音を伝える人についてです。【私たちの福音は、ことばだけでなく、力と聖霊と強い確信を伴って、あなたがたの間に届いたからです。】「福音」とは良い知らせのことです。具体的にはイエス・キリストの死と復活によって成し遂げられた救いの良い知らせです。この福音を「私たちの福音」とパウロが言っているのは、パウロをはじめ福音を伝える人たちが、自ら福音を信じ、その福音によって救われた経験を持っているからです。私たちにとっても福音は「私たちの福音」です。なぜなら私たちもキリストの福音を信じて救われたという経験を持っているからです。だれでもイエスを救い主と信じるなら、その時にすべての罪が十字架の贖いによって赦されて救われます。そしてその時から、キリストの福音は私の福音、私たちの福音となるのです。

さて、パウロはこの福音をテサロニケの人々に伝えました。その時、福音は、【ことばだけでなく、力と聖霊と強い確信を伴って、】テサロニケ人の間に届いたのでした。これはどのような意味でしょうか。まず福音はことばで伝えます。パウロはキリストの十字架と復活によるメッセージをことばで伝えました。使徒17:2,3にはテサロニケ伝道についてこう記されています。【パウロは、いつものように人々のところに入って行き、三回の安息日にわたって、聖書に基づいて彼らと論じ合った。そして、「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです」と説明し、また論証した。】そして、このようにことばで福音を伝えた時に、力と聖霊と強い確信が伴ったのです。

まず、力とは聖霊の力です。使徒1:8には【聖霊があなたがたに臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして…わたしの証人となります】とあります。パウロは聖霊の力によって福音を伝えたのです。次に聖霊が伴いました。その意味は、聖霊がパウロの語る福音の意味を、聞き手であるテサロニケ人に解き明かしたのです。その結果、テサロニケ人は福音を理解し、イエスを主と信じることができたのです。Ⅰコリント12:3に【聖霊によらなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません】とあるとおりです。そして次に強い確信が伴いました。パウロは自分が信じて救われたキリストの福音を、強い確信をもって伝えました。もし自分が伝える福音を疑心暗鬼で伝えたらどうでしょうか。「信じたら救われるかもしれないし、救われないかもしれませんが、信じたほうがいいと思いますよ」などと伝えたら、いったい誰が信じるでしょうか。パウロはそうではなく、「イエスはキリスト救い主です。私もイエスを救い主と信じて救われました。あなたもイエスを救い主と信じるなら、必ず救われます ！」と強い確信をもって伝えたのです。

このパウロの福音宣教から私たちもどのように伝道すればよいかを教えられます。伝道する時、まず必要なのは「私たちの福音」を言葉で伝える準備です。聖書の難しい話をする必要はありません。十字架の福音を伝えればよいのです。「イエスは私たちの罪のために身代わりに神のさばきを受けて十字架で死んでくださいました。しかし、3日目によみがえり、ご自分がまことの救い主であることを証明されました。今、天におられるイエスは、ご自分を救い主と信じる者のすべての罪を赦し、永遠のいのちの救いを与えてくださいます。あなたもイエスを救い主と信じましょう。」そして、私もイエスを信じて救われましたという、救いの証しをするのです。それが「私たちの福音」を強い確信を伴って言葉で伝えることです。そしてその時、私たちの伝道にも聖霊の力と聖霊の解き明かしが伴います。そして福音を受け入れた人は、必ず救われるのです。伝道の結果は主にゆだね、「私たちの福音」を人々のところに届ける者となりましょう。

２．聖霊による喜び ６a

次に福音を受け入れる人についてです。【６aあなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、】使徒17章を見ると、パウロの宣べ伝えた福音をある人たちは受け入れました。17:4【彼らのうちのある者たちは納得して、パウロやシラスに従った。神を敬う大勢のギリシア人たちや、かなりの数の有力な婦人たちも同様であった。】一方、別のユダヤ人たちは福音を受け入れず、かえってねたみにかられ、暴動を起こし町を混乱させました。そしてパウロたちを捕らえようとしたのです。そこからテサロニケではクリスチャンに対する迫害が始まったのです。パウロたちはテサロニケの信じたばかりのクリスチャンたちによって次の町ベレヤに送られました。しかし、テサロニケに残るクリスチャンたちは、イエスを信じたことにより多くの苦難の中にありました。けれども、その苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れたのです。

苦難と喜びは本来は対極にあるもので、一緒になることはありません。普通は苦難には苦しみや悲しみがあることでしょう。けれどもみことばを受け入れた人には、苦難があろうがなかろうが、聖霊による喜びが必ずあるのです。その喜びとは救いの喜びです。罪深い私のためにイエスが身代わりに神のさばきを受けてくださったことを信じる時、私たちは神の愛を知り、救いの喜びで満たされます。その喜びはこの世のものではなく、聖霊の賜物、御霊の実としての喜びです。そして、不思議なことにイエスを信じたために迫害の苦難を受けても、聖霊による喜びはなくなることなく、ますます大きくなるのです。そして、その人の内に信仰の確信がますます強くなるのです。

「受け入れる」とは「歓迎する」という意味の言葉です。「みことばを受け入れる」とは「イエスを自分の心の中に歓迎して受け入れる」ことなのです。黙示3:20でイエスは言われました。【見よ。わたしは戸の外に立ってたたいている。】戸とは私たちの心の戸です。イエスは私たちの心の戸の外側に立って、ノックしておられます。心の戸を開くか開かないかは、私たちに委ねられています。イエスは続けて言われます。【だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。】私たちが自分の心の戸を開き、イエスを歓迎して受け入れるなら、イエスは喜んで私たちの心の中に、十字架の救いをもって入ってくださいます。食事をするとは親しい交わりを持つということです。イエスを救い主として心に受け入れるなら、その時から、イエスとの親しい交わりが生涯、そして永遠に与えられるのです。そしてその人には聖霊による喜びが心にいつも与えられます。まだイエスを自分の救い主として心に受け入れておられない方は、ぜひ「私はイエス様を私の救い主として歓迎し、心にお迎えします」とお祈りしてください。その時、あなたの心にも聖霊による喜びが与えられます。

３．主に倣う者５b,６b,７

さて、イエスを救い主と信じたテサロニケのクリスチャンたちはその後どうなったでしょうか。彼らは主に倣う者になりました。【6b私たちに、そして主に倣う者になりました。】彼らは主に倣う者になる前に、私たち、すなわち福音を伝えたパウロたちに倣う者となりましたとあります。これはどのような意味でしょうか。5bにはこのようにあります。【あなたがたのところで、私たちがあなたがたのためにどのように行動していたかは、あなたがたが知っているとおりです。】テサロニケのクリスチャンは、パウロたちが町に滞在中、パウロたちの信仰と生活を見て、イエスを信じて生きるとはどのようなことかを学び、彼らに倣う者となったのです。どのように祈ればよいのか、どのように聖書を理解すればよいのか、どのようにクリスチャンとして生活すればよいのかを、クリスチャンになったばかりのテサロニケ人はパウロたちの行動を見て、それをまねたのです。その結果、パウロが主に倣う者であるように、彼らも主に倣う者となったのです。

私たちも同じです。私たちもクリスチャンになった時、教会生活の中で先輩クリスチャンから信仰生活を教えられ、その人たちに倣う者になることによって、主に倣う者となってきました。ですから、先に救われたクリスチャンの責任は重大です。新しくクリスチャンになった人たちの良き模範となるという責任を主から与えられているのです。後に続くクリスチャンは自分たちを手本としていることを覚え、先に救われた私たちが主に倣う者となることが大切です。もちろん、完全な模範を示すことはできないでしょう。けれども主に倣うという生き方を自ら行うことによって、私たちを見る新しいクリスチャンも、主に倣う者となっていくことができます。

このことは子育てにおいても言えることです。エペソ6:4にはこうあります。【父たちよ。自分の子どもたちを怒らせてはいけません。むしろ、主の教育と訓戒によって育てなさい。】このみことばは父親に向けられていますが母親にも当てはまります。その時の気分や一貫性のないしつけを子どもにすれば、子どもは怒るでしょう。そうではなく、クリスチャンの親は主の教育と訓戒によって子どもを育てなければなりません。そのためには、親自身が主の教育と訓戒を受け、主を信じて生きることを生活を通して子どもに見せるのです。親も失敗をします。その時には主の前に悔い改め、子どもにも悪いことがあれば謝ります。感謝なことがあれば、家族一緒に神に感謝の祈りをします。そのような信仰生活を親がすることによって、子どもは主に倣う者に成長していきます。

さて、テサロニケのクリスチャンたちは主に倣う者になりました。しかし、そこで終わりませんでした。その結果があったのです。【その結果、あなたがたは、マケドニアとアカイアにいるすべての信者の模範になったのです。】彼らはパウロたちの模範に倣い、主に倣う者となりました。すると、今度は彼らが周りのクリスチャンたちの模範となり、周りのクリスチャンたちはテサロニケ教会に倣うようになったのです。当時のギリシアは北のマケドニア州と南のアカイア州に分かれていました。マケドニアにはピリピ、テサロニケ、べレアがあり、その町の教会がありました。アカイアにはアテネやコリントがあり、パウロはコリントからこの手紙を書いています。そしてテサロニケ教会はギリシア全域の教会のすべての信者の模範となったのです。なんとすばらしいことでしょうか。

このことは今日の私たちへの模範でもあります。新しいクリスチャンは先輩クリスチャンを模範とし主に倣う者となって成長します。すると今度はその人たちがさらに新しいクリスチャンの模範となっていくという成長の循環が始まっていくのです。私達の教会も教会の中でそのような成長の循環が生まれるようにしましょう。さらに私たちの教会が周りの教会の良き模範となることを目指して福音宣教と信仰生活に励みましょう。

Ⅰテサロニケ１章８－１０節「響き渡る主のことば」

１．伝道と信仰 ８

先週はテサロニケ教会がパウロが宣べ伝えた福音を信じ、苦難の中にも聖霊による喜びに満たされ、主に倣う者となり、さらにはギリシャ各地の信者の模範となったことを見ました。今日はその続きです。第一の点ではテサロニケ教会の伝道と信仰について見ていきます。【8a主のことばがあなたがたのところから出て、マケドニアとアカイアに響き渡っただけでなく、】テサロニケ教会は誕生間もない教会でしたが、短期間でギリシャ各地の信者の模範となりました。その理由は彼らの伝道にありました。彼らは救われると同時に、この喜びを多くの人に伝えたいと願い、福音を宣べ伝えました。

当時ギリシャは北部のマケドニア州と南部のアカイア州に分かれ、テサロニケはマケドニア州の州都でした。現在もテサロニケはギリシャ第2の都市ですが、当時もマケドニアの中心都市で、ローマと東方を結ぶエグナティア街道が通り、港があり、商業や交通の要所として各地から人々が集まっていました。テサロニケのクリスチャンたちはギリシャ各地から集まる人々に福音を伝えたのです。その結果、その人たちがイエスを信じ、彼らが自分たちの町に帰り、福音を伝えることによって、ギリシャ各地に福音が響き渡ったのです。「響き渡った」とあるように、稲妻が東から西に響き渡るように、福音がテサロニケからギリシャ各地に広がり続けていったのです。

テサロニケで伝道することは決して生易しいことではありませんでした。ユダヤ教徒によるクリスチャンへの迫害は続き、彼らは多くの困難の中にいました。けれども、彼らが信じた福音は心の中に閉じ込めておくことはできませんでした。なんとしてでもこの福音を多くの人に伝えたいと願ったのです。そしてそれを実行に移し、彼らは機会あるごとに、主のことばを伝えました。その結果、多くの人がイエスを信じただけでなく、宣べ伝えた彼らの信仰が強められ、成長していったのです。このことは私たちにとっての大きな励ましです。私たちも伝道を通して信仰の成長をするのです。心に蓄えたみことばを他の人に伝えることによって、私たちは成長します。40周年に向けての活動計画の一つに「伝道する教会」があります。伝道と成長は同時進行によって行われます。成長してから伝道するのではなく、伝道しながら成長するのです。私たちもテサロニケ教会のように主のことばが人々の心に響き渡る伝道をしていきましょう。

さて彼らの伝道はみことばを宣べ伝えるだけではありませんでした。伝道には信仰が伴っていたのです。【8b神に対するあなたがたの信仰が、あらゆる場所に伝わっています。そのため、私たちは何も言う必要がありません。】みことばを伝えることは、自らの信仰を伝えることです。私たちの信仰はみことばに根差し、みことばを伝えることは、同時に私たちの信仰を伝えることなのです。具体的には、私たちの信仰の証しを伝えるのです。それはどのようにイエスを信じて救われたかという証しであり、イエスを信じた結果、どのように人生が変わったかという証しです。さらには、その信仰を生活を通して見せるのです。テサロニケのクリスチャンは多くの苦難の中で聖霊による喜びに満たされていました。それを見た人々は、なぜ彼らは苦難の中で喜んでいられるのか不思議に思い、その理由を知りたいと思いました。そこでイエスを信じて救われた恵みを伝えたのです。そして「あなたの人生にも様々な困難があるでしょう。けれどもイエスを信じるなら困難な中でも主が共にいて喜びをもって人生を歩むことができます」と証ししたのです。

人々は私たちがことばで福音を伝える前に、私たちの生活を見ています。Ⅰテサロニケ5章にあるように、私たちがいつも喜び、絶えず祈り、すべてのことにおいて感謝する信仰生活をしているなら、人々はその秘訣を知りたいと願うでしょう。その理由がキリストの救いであると伝えるのです。伝道には私たちの信仰が伴います。主を信じる喜びと感謝に満ちて、主のことばを人々の心に響き渡させましょう。

２．信仰の内容 ９、10a

9—10aにはテサロニケ教会がどのような信仰を持っていたか、即ち彼らの信仰の内容が記されています。それは私たちの信仰の内容と共通するものです。この信仰の内容は、イエスを信じて救われるとはどのようなことかを教えてくれます。４つの信仰の内容が記されていますので、一つずつ見てみましょう。一つ目は福音に対する信仰です。【9a人々自身が私たちのことを知らせています。私たちがどのようにあなたがたに受け入れてもらったか、】人々自身とは、テサロニケのクリスチャンから福音を伝えられ、信じた人たちのことです。彼らを通して、テサロニケ教会の伝道と信仰がギリシャ各地の人々に伝わりました。

そしてパウロたちがどのようにテサロニケの兄弟姉妹に受け入れてもらったかが伝えられました。これはパウロたちがどのようにもてなしを受けたかということではありません。そうではなくパウロが伝えた福音がどのようにテサロニケの兄弟姉妹に受け入れられたかということです。そのことが2:13に記されています。【あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。】テサロニケのクリスチャンはパウロからイエス・キリストの福音を聞いた時、様々な人たちが教える教えの一つとして聞いたのではありませんでした。そうではなく、パウロの語る福音を神のことばと信じて受け入れたのです。ここに彼らの福音に対する信仰が現わされました。キリストの福音は単なる人間のことば、人間の教えではなく、神のことばであると信じて受け入れる時、私たちは救われるのです。イエスが私たちのために十字架で死に、私たちのすべての罪を贖ってくださったという神の救いを信じて受け入れる時、私たちのすべての罪が赦され、救われるのです。

二つ目は回心です。回心は心が改まるではなく、心が回る、回転するという漢字を使います。【また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、】回心は偶像からまことの神への方向転換です。それまで偶像の神の信じていた人が、偶像から180度回転し、まことの神の信じるようになることです。これは救いの結果そのようになるのです。パウロがアテネに行った時、町はギリシャの神々の偶像で満ちていました。それはパウロがこの手紙を書いているコリントでもそうであり、テサロニケでもそうでした。ギリシャの町々にはギリシャの神々の偶像で満ちていたのです。そのような環境で育った人たちは当然偶像礼拝をしていました。けれどもイエスを救い主と信じた時、彼らは天地の造り主であり自分の創造者である本当の神を知ったのです。本物の神を知った時、偶像は人間が作った偽物の神だと分かりました。その結果、彼らは偶像からまことの神に立ち返ったのです。日本も当時のギリシャと同じように偶像に満ちています。けれどもイエスを信じて救われるとまことの神がわかります。そうすると、今まで信じていた神道や仏教や先祖崇拝からまことの神に方向転換して立ち返るようになるのです。

三つ目は神への奉仕です。【生けるまことの神に仕えるようになり】イエスを救い主と信じる時、私たちはまことの神のしもべとなり、神への礼拝と奉仕をする者となります。生けるまことの神とありますが、これは偶像との対比です。偶像にはいのちがありません。一方まことの神は生ける神であり、いのちの源です。私たちにいのちを与えて生かしておられる神です。その神に日々礼拝をささげ、日曜日には共に集って礼拝をささげます。そして、神への奉仕を行って、神に仕える人生を過ごします。私たちもイエスを信じて救われた結果、生けるまことの神に仕えるようになりました。

四つ目の信仰の内容は、主の再臨を待ち望む信仰です。【10a御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを、知らせているのです。】3節にも【私たちの主イエス･キリストに対する望みに支えられた忍耐】とありました。これは主の再臨に対する望みに支えられた忍耐ということです。彼らは苦難の中でも、主が再び来られて永遠の御国に入れて下さる希望を告白し、忍耐して苦難に耐えたのです。クリスチャンの信仰には再び来られる主を待ち望む再臨信仰があります。黙示録の最後にイエスは「しかり、わたしはすぐに来る」と言われました。それに対する私たちの応答は、「アーメン。主イエスよ。来てください」です。私たちも再臨の主を待ち望つつ、信仰生活に励みましょう。

３．信仰の中心 10b

クリスチャンとは日本語ではキリスト者であり、キリスト者はキリストを信じる者のことです。キリストとは救い主という意味です。すなわちクリスチャンの信仰の中心には、イエスがキリスト救い主であるとの信仰があります。10bにはそのことが教えられています。【10bこの御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた方、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスです。】私たちが信じるイエスとはどのようなお方でしょうか。4つのことが教えられています。一つ目は、イエスは子なる神です。この文章を短くすると、「この御子こそイエスです」となります。御子とは神のひとり子、すなわち子なる神のことです。イエスは子なる神が人となってこの世に来て下さったお方です。ですからイエスには何の罪もなく、人間の代表になって、すべての人の罪を贖うことができたのです。二つ目はイエスの死です。死者とありますが、これはイエスが十字架で死なれたことです。なぜ死なれたのでしょうか。それは私たちの罪を贖うために、神のさばきを身代わりに受けたからです。

三つ目はイエスの復活です。「神が死者の中からよみがえらせた方」とあります。父なる神はイエスの十字架の死によって、人間の罪の贖いが完成したので、イエスを死者の中からよみがえらせました。イエスの復活は死に対する勝利であり、イエスを信じる者もやがて復活する保証です。そして4つ目はイエスによる救いの完成です。【やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエス】です。イエスが再臨されると、最後の審判が行われます。その時すべての人は、神の前に出なければなりません。罪を持ったままで神の前に出れば、神のさばきを受け永遠の滅びに至ります。一方イエスを救い主と信じた者は、イエスが十字架で私たちの身代わりに神のさばきを受けてくださったので、さばかれることなく、天の御国に迎え入れられるのです。その時、私たちの救いは完成し、永遠に神と主イエスとともに天の御国で過ごすようになるのです。

クリスチャンはイエスをキリスト救い主と信じる人です。子なる神が人となってこの世に来られ、十字架で罪の贖いを成し遂げて死に、3日目によみがえり、天に昇り、再び来られて私たちに救いの完成を与えてくださる。このイエスを信じる時、私たちの心に救いの喜びが満ち溢れ、偶像からまことの神に立ち返り、神に仕え、主を待ち望む新しい人生が始まります。私たちも主の救いに感謝し、この喜びを他の人に分かち合いましょう。そして、主のことばが私たちを通して地域の人々の心に響き渡るために遣わされましょう。

Ⅰテサロニケ２章１－６節「伝道とは何か」

１．神に勇気づけられる伝道 １－２

2章ではまずパウロがどのようにテサロニケで伝道したかについて記しています。パウロの伝道を通して、私たちにとって伝道とは何か、また私たちが伝道する時にどのようなことに心がければよいのかを教えられます。まず1節を見てみましょう。【兄弟たち。あなたがた自身が知っているとおり、私たちがあなたがたのところに行ったことは、無駄になりませんでした。】無駄にならなかったとは、テサロニケにおいて伝道の実が結び、救われる人が起こされ、教会が誕生したということです。しかし、それは決して簡単なことではありませんでした。2節ではパウロがテサロニケで伝道した状況を記しています。

【それどころか、ご存じのように、私たちは先にピリピで苦しみにあい、辱めを受けていたのですが、私たちの神によって勇気づけられて、激しい苦闘のうちにも神の福音をあなたがたに語りました。】パウロは当初、第2次伝道旅行でヨーロッパに伝道に行く計画はありませんでした。ところが、現在のトルコ、当時のアジア地域で伝道することを聖霊が禁じた結果、トロアスまでやって来ました。そこで「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください」というマケドニア人の叫びを幻で見たのです。パウロはこれは主の導きであると確信し、船に乗りマケドニアに着き、ピリピで伝道を始めました。ところがパウロが占いの霊に着かれた女奴隷から悪霊を追い出した結果、彼女の主人に捕えられました。町の長官はパウロとシラスをきちんと取り調べることもせず、2人を鞭打ち、牢に入れ、足かせをはめました。それが【私たちは先にピリピで苦しみにあい、辱めを受けていた】ということです。この苦しみの中で看守とその家族が救われました。パウロたちのヨーロッパ伝道はしょっぱなから苦難が伴いました。そのような苦難の中で次の伝道地であるテサロニケに向かったのです。

パウロはこのような状況で気落ちすることなく、伝道を続けた理由を書いています。それは【私たちの神によって勇気づけられて】ということです。神がパウロたちに伝道を続ける勇気を与えてくださったのです。パウロも生身の人間です。むち打たれれば激しく痛み、傷が癒えるまで何日も痛むでしょう。ヨーロッパ伝道の厳しさを最初のピリピで身をもって知りました。それでも前進することができたのは、神がパウロたちを勇気づけたからでした。パウロは神のことを「私たちの神」と呼んでいます。パウロの状況をよく知り、パウロといつもともにいて、パウロを助けてくださるパウロの神です。その神がこれからも共にいるから恐れるなとパウロを励まし勇気づけてくださったので、パウロは勇気を得て、テサロニケに行くことができました。そして、テサロニケに着くとそこでも困難に直面しました。【激しい苦闘のうちにも】と言っているので、テサロニケでもパウロが伝道し、人々が救われ始めるやいなや、ユダヤ人による迫害が始まったのです。そしてこのままではパウロたちの身が危なくなったので、テサロニケの信者たちによってベレヤに送り出されました。そのような【激しい苦闘のうちにも神の福音をあなたがたに語りました】とパウロは言っています。

私たちは伝道する時、パウロのような苦難に会うことはほぼないでしょう。現代の日本では自由に伝道することができます。けれども、それでも私たちは伝道する時、パウロと同じように、私たちの神によって勇気づけられる必要があります。神が勇気づけてくださらなければ、伝道できないのが私たちの姿です。そんな弱い私たちを、私たちの神が勇気づけてくださるので、私たちも伝道できるのです。ヨハネ16:33でイエスは言われました。【世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。】イエスは今日も「伝道する教会」を目指す私たち一人ひとりに「勇気を出しなさい」と勇気づけてくださっています。私たちもパウロのように「私たちの神によって勇気づけられて」福音を伝える者となりましょう。

２．神の福音の勧め ３

3節以降、パウロは自分たちの伝道は、何々ではないという表現を使って、自分たちの伝道を語っています。これは当時、様々な宗教の教師たちが各地を回り、伝道していたことが背景にあります。パウロの伝道に反対するテサロニケのユダヤ人は、パウロも他の宗教家と同じでたらめな伝道者だと言って、非難していたのです。それに対してパウロは自分たちはそのようなものではないことをここで弁明しながら、自分たちの伝道とはどのようなものかを語っているのです。

【私たちの勧めは、誤りから出ているものでも、不純な心から出ているものでもなく、だましごとでもありません。】「私たちの勧め」の「勧め」は「宣教」とも訳される言葉です。何を宣べ伝えるのかというと2節の「神の福音」です。「神の福音」は1:5では「私たちの福音」とも言われ、「私たちが信じて救われた神の福音」です。福音の内容は、キリストの十字架と復活によって成し遂げられた神の救いです。パウロはここで、自分たちの伝道の特徴を3つ挙げています。

一つ目は「誤りから出ているものではない」です。即ち、福音は間違った教えではなく真理であるということです。どんなに熱心に伝えたとしてもその教えが間違ったものであれば、その伝道は人々に益をもたらすどころか害をもたらします。しかし、福音は真理なのです。福音の中心は救い主イエス・キリストです。そのイエスがヨハネ14:6で言われました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」父なる神への唯一の道であり、永遠のいのちを与えてくださるイエスは真理そのものなのです。イエスが私たちに与えて下さる助け主聖霊も真理の御霊です。聖霊は真理のみことばを私たちに教えます。そしてみことばを信じ、みことばによってイエスを信じる時、「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします」というイエスのみことばが私たちの内に成就するのです。ヨハネ8:32

二つ目は「不純な心から出ているものでもない」です。即ちパウロの伝道の動機は純粋なものでした。人の人気取りをしようとしたり、自分の利益を得ようとする不純な動機は一切ありませんでした。ただ、すべての人を救う十字架のことばを知ってほしいという願いと、福音を伝えることが神のみこころであるという使命に立って伝えたのです。

3つ目は「だましごとでもない」です。パウロがテサロニケ伝道の後、アテネで伝道した時、キリストの復活を伝えると人々は信じませんでした。復活は歴史の中でイエス以外にありません。ですからキリストの復活は作り話、神話、だましごとではないかと思っても当然かもしれません。パウロもⅠコリント15章で、もしキリストがよみがえらなかったのに、よみがえったと宣べ伝えるのなら、私たちは神に対して偽証していることになり、すべての人の中で一番哀れなものですと言っています。そしてその後で、「しかし、今やキリストは眠った者の初穂として、死者の中からよみがえられました」と言っているのです。福音はだましごとではなく、事実に基づいたものであるので、信頼できるのです。私たちも事実に基づく真理の福音を、人々の救いと神がくださった宣教の使命に立って、これからも伝えていきましょう。

３．神に喜んでいただく伝道 ４－６

パウロはさらに自分たちの伝道について4-6節で記しています。一言で言うならばパウロは「神に喜んでいただく伝道」をしたのです。【むしろ私たちは、神に認められて福音を委ねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせるのではなく、私たちの心をお調べになる神に喜んでいただこうとして、語っているのです。】パウロは、自分たちは「神に認められて福音をゆだねられた者」という自覚がありました。私たちもそうです。救われた時から、私たちも「神に認められて福音をゆだねられた者」となりました。ローマ10:15の今年のみことばの前に「遣わされることがなければ、どのようにして宣べ伝えるのでしょうか」とあります。そうです。神はすべてのクリスチャンを良い知らせを伝えるために遣わしておられるのです。

パウロはそのことを自覚し、【それにふさわしく、人を喜ばせるのではなく、私たちの心をお調べになる神に喜んでいただこうとして、語っているのです】と言いました。パウロの伝道の動機は「神に喜んでいただく」ことでした。神からゆだねられた福音を、神から遣わされて、人々に忠実に伝えることを神は喜ばれるのです。そして、ここでは神に喜んでいただく伝道は、人を喜ばせることと正反対であると教えています。5-6節には人を喜ばせるために語ることが具体的にどのようなことかを３つ説明しています。

一つ目は「へつらいのことばを用いる」ことです。【あなたがたが知っているとおり、私たちは今まで、へつらいのことばを用いたり】へつらいのことばを用いるとは、人の気に入るような話をすることです。人に気に入られるために、できるだけ当たり障りのない話をすることです。しかし、そのような動機で福音を伝えようとすれば、福音の内容は欠けだらけになってしまうでしょう。人間の罪を語らない、神のさばきを語らない、キリストの奇跡や復活を語らない、道徳的でだれもが納得できる話だけすれば、人は救われるでしょうか。そのような話では救われません。神に喜んでいただく伝道は、福音を忠実に語ります。人の罪を語れば、聞く人は引いてしまうかもしれません。しかし、神の前に自分の罪を知ることによって、初めて罪からの救いが必要であることを悟ります。罪人に対する神のさばきがあることが分かることによって、キリストの十字架の身代わりの死がわかります。そして、自分を救うためにイエスは十字架で身代わりに神のさばきを受けてくださったことを知り、イエスを救い主と信じることができるのです。パウロは福音を忠実に語りました。私たちも福音を忠実に語りましょう。それが、神に喜んでいただく伝道です。

二つ目と三つ目は自分を喜ばせるために語る例です。まず二つ目は「貪りの口実を設ける」ことです。【貪りの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。】具体的には、口実を設けて人から貪る、即ちお金を得ることです。金銭目当ての伝道です。統一教会の問題が連日報道されていますが、彼らの伝道の目的の一つが金銭目当てであることが次々と明らかになっています。パウロの時代も金銭目当ての伝道をする宗教家たちがいました。しかし、パウロは決して人々から貪ることを目的に伝道しませんでした。このパウロの伝道姿勢こそ、私たちの伝道姿勢です。

三つ目は「人からの栄誉を求めない」ことです。【また私たちは、あなたがたからも、ほかの人たちからも、人からの栄誉は求めませんでした。】人からほめられるため、自分の名声を高めるために伝道するなら、なんと空しい伝道でしょうか。私たちの伝道によって人が救われたなら、栄光はすべて神にお返しします。私たちはただ成すべきことをしたしもべにすぎないからです。栄光は神に！私たちが神の栄光を奪ってはいけないのです。私たちも神に喜んでいただく伝道をしましょう。それこそ、私たちの目指す伝道です。その伝道の結果として、救われた人々が喜び、私たちも共に喜ぶことができるのです。

頌栄 教会福音讃美歌２６９

Ⅰテサロニケ２章７－１２節「伝道者の姿勢

１．幼子のように ７a

先週は2章の前半から、パウロの伝道を通して「伝道とは何か」を学びました。今日はその続きで「伝道者の姿勢」について見ていきます。パウロはここでテサロニケの兄弟姉妹に対して、キリストの使徒としてどのように接してきたかを述べています。それは今日の牧師伝道者がどのような姿勢で人々に接するかを教えるとともに、すべてのクリスチャンの証し人としての姿勢を教えています。パウロはここで使徒としての3つの姿勢を述べています。その第1は幼子のような姿勢です。【キリストの使徒として権威を主張することもできましたが、あなたがたの間では幼子になりました。】

パウロはキリストの使徒でした。使徒とは「特別な使命を帯びて遣わされた者」という意味です。キリストの使徒は、キリストから福音を伝え教会を建て上げるための使命と権威を与えられて遣わされた者です。使徒職に任命されたのはごく限られた人で、12弟子とともに復活の主にお会いしたパウロも使徒として任命され、特別の使命と権威が与えられました。ですからパウロはテサロニケの人々に使徒としての権威を主張することもできたのです。自分はキリストから使徒としての権威を与えられている者だから、自分を尊敬し、重んじるようにと主張することもできたでしょう。けれどもパウロはそのようにはせず、むしろテサロニケの人々の間で幼子になったと言っています。幼子になったとは幼子のようになったということです。その意味は、自ら神の救いを必要とする罪人としての謙遜な姿勢です。また神の恵みによって救われ、今の私になりましたというへりくだった姿勢です。幼子のように、子どものようになることは神の国の一員となるために必要な姿勢であり、また神の国の一員としてふさわしい姿勢です。

イエスはルカ18:16-17で言われました。「しかし、イエスは幼子たちを呼び寄せて、こう言われました。『子どもたちをわたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。まことに、あなたがたに言います。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。』」パウロは以前はパリサイ派の学者でユダヤ教に熱心で、クリスチャンを迫害していました。しかし復活のイエスとお会いした時、彼は幼子のようにへりくだり、イエスを自分の救い主として受け入れて救われました。さらには福音を異邦人に伝える使命を与えられ、使徒として任命されました。そして、使徒として遣わされる時にも、自分が救われた時の謙遜な姿勢をもって、人々に仕えたのです。

私たちも人々に福音を伝え、兄弟姉妹に仕える時には、キリストの前での幼子のような謙遜な姿勢を持つことが必要です。それはパウロの姿勢であり、さらにはキリストご自身の仕える者としての姿勢でした。「あなたがたの間では幼子になりました」というパウロに倣って、謙遜な伝道者でありたいと自ら願いますし、一人ひとりが謙遜なキリストの証し人を目指しましょう。

２．母親のように ７b－１０

第2の伝道者の姿勢は母親のような姿勢です。まず7b-8節を見てみましょう。【私たちは、自分の子どもたちを養い育てる母親のように、あなたがたをいとおしく思い、神の福音だけではなく、自分自身のいのちまで、喜んであなたがたに与えたいと思っています。あなたがたが私たちの愛する者となったからです。】パウロはテサロニケの兄弟姉妹に対して「自分の子どもたちを養い育てる母親のように」なったと言っています。テサロニケのクリスチャンが福音を信じた時、パウロと彼らの間に母と子のような人格的な愛の関係が生まれたのです。「あなたがたが私たちの愛する者となったからです」と言っているとおりです。母親は子どもが生まれると子どもをいとおしく思います。そして、いざとなれば自分自身のいのちまで喜んで与えたいと思うほど、子どもを愛します。そのような危機的な状況でなくても、子どものために自分自身をささげて、子どもを育てます。もちろん、母親も子育てに疲れ悩むこともあります。子育てには父親の協力が必要不可欠ですし、さらには周りの人のサポートが必要です。教会でも子育て中の母親のサポートを続けて行ければと願います。

また、福音を伝えることは同時に愛を伝えることです。その愛は神の愛であり、神があなたを愛しておられることを私たちの愛の姿勢をもって伝えるのです。さらに福音を信じた人を育てるためにも、みことばと愛の両方が必要です。Ⅰペテロ2:2には【生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです】とあります。これはみことばの乳をいただくクリスチャンの姿勢です。一方、みことばの乳を与えて育てる人は、単にみことばの情報を与えるのではなく、母親のような愛をもってみことばの乳を与えることが必要なのです。みことばを愛をもって伝える時、みことばを受ける側も十分受け取り、成長していくことができるのです。

さらに、子どもを愛する母親は、自ら模範を示して子どもを育てます。母親の模範は子どもへの愛から出て来るのです。同様にパウロも、母親が子どもに模範を示すようにテサロニケの兄弟姉妹に模範を示しました。【9兄弟たち。あなたがたは私たちの労苦と辛苦を覚えているでしょう。私たちは、あなたがたのだれにも負担をかけないように、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました。】パウロは使徒としてテサロニケの兄弟姉妹から経済的に支えてもらうこともできたでしょう。けれどもパウロはあえてそのようなことをせず、自分で働きながら、伝道したのです。これはまずテサロニケ人につまずきを与えないためでした。当時、様々な宗教家たちが各地を訪問し、教えながら、人々から金銭を求めていました。パウロの伝道に反対するユダヤ人たちは、パウロもそのような宗教家の一人で、伝道の目的は金銭を得るためだと言ってパウロを非難しました。それに対してパウロは5節で「私たちは…貪りの口実を設けたりしたことはありません」と言っています。そして、そのことを証明するために夜昼働き、労苦しながら福音を伝えたのでした。一方、ピリピ4:16には【テサロニケにいた時でさえ、あなたがたは私の必要のために、一度ならず二度までも物を送ってくれました】とあります。テサロニケの前に伝道したピリピ教会が早速パウロの伝道を経済的に支えたのです。さらにパウロが夜昼働いて伝道した理由は、怠惰な生活をしている人たちに対して、仕事に励む模範を示すためでした。

もう一つの模範は10節にある信仰者としての生き方を示すことでした。【また、信者であるあなたがたに対して、私たちが敬虔に、正しく、また責められるところがないようにふるまったことについては、あなたがたが証人であり、神もまた証人です。】子どもは親の生き方を真似ます。しぐさや言葉遣いなど親に似てきます。パウロは母のようにクリスチャンとしてどのように生きるべきかの模範を示しました。それはまず敬虔に生きることです。敬虔とは神に対する信仰、信頼をもって生きることです。どんなときにも主に信頼し、みことばと祈りと礼拝を大切に神に仕えていく生き方です。次に正しく生きることです。神と人の前に正しく真実に生きることです。そして責められるところがない生き方です。不正を行わず悪の道に染まらない生き方です。パウロがそのように生きたことはテサロニケの兄弟姉妹も神ご自身も証人ですと言いました。私たちも新しくクリスチャンになった人に対して母親のような愛と模範を示しながらともに成長する者となりましょう。

３．父親のように １１－１２

第3の伝道者の姿勢は父親のような姿勢です。【また、あなたがたが知っているとおり、私たちは自分の子どもに向かう父親のように、あなたがた一人ひとりに、12ご自分の御国と栄光にあずかるようにと召してくださる神にふさわしく歩むよう、勧め、励まし、厳かに命じました。】パウロは「父親のように、勧め、励まし、厳かに命じました」と言っています。聖書時代、子どもを教育する責任は父親にあるとされていました。もちろん母親も子どもを教えますが、父親は人としていかに生きていくべきかを子どもに教える責任があったのです。父親は子どもに勧め、励まし、厳かに命じます。厳かに命じるとは権威をもって命じることです。しかも一人ひとりの子どもの必要に応じで教えます。

ではパウロは父親のようにテサロニケの兄弟の一人ひとりに何を勧め、励まし、厳かに命じたのでしょうか。それは「神にふさわしく歩むように」です。クリスチャンは神にふさわしく歩む、あるいは神の前にふさわしく歩むことが求められています。私たちは人の前ではなく、神の御前に歩んでいます。人前ではごまかしがきいても、神の前ではききません。神は何でも見ておられるし、何でも知っておられます。だから神の前にふさわしい歩みをする必要があるのです。ふさわしいという言葉には価値があるという意味があります。神の前に価値がある歩みをすることです。人の前に価値があるものはたくさんあります。しかしそれらのもので神の前には価値のないものもたくさんあるのです。

私たちの神は私たちを永遠に価値のあるものにあずかるように召してくださる神です。その永遠に価値のあるものとは神の国と栄光です。【ご自分の御国と栄光にあずかるようにと召してくださる神】とあるとおりです。「ご自分の御国」とは神の国のことです。イエスを信じた時、私たちはすでに神の国に召され、神の国の民とされました。そしてやがてイエスの再臨の時に神の国は完成します。その時栄光に満ちた神の国に私たちは召され、私たちの救いは完成し、私たちも栄光の姿に変えられます。そのように神の国と栄光にあずかるように召してくださる神にふさわしく地上で歩むのです。

箴言には知恵が擬人化され、父がわが子に語る教えに満ちています。3:1「わが子よ。私の教えを忘れるな。心に私の命令を保つようにせよ。」3:11「わが子よ。主の懲らしめを拒むな。その叱責を嫌うな。父が愛しい子を叱るように、主は愛する者を叱る。」4:1,2「子たちよ。父の訓戒に聞き従え。耳を傾け、悟りを得よ。私が良い教訓をあなたがたに授けるからだ。私の教えを捨ててはならない。」パウロはこのように父が子に語るように、神にふさわしい歩みをするように教えたのです。

教会における伝道と牧会には、幼子のような謙遜と母親のような愛と父親のような教えが必要です。40周年に向けた活動計画の一つに【クリスチャンとしての成長】があります。教会に幼子のような謙遜と母親のような愛と父親のような教えが満ちるならば、教会に集う一人ひとりが主にあって成長していくことでしょう。現にパウロが幼子、母親、父親のように伝道と牧会したテサロニケ教会は短期間でギリシャ各地の信者の模範となるほどの成長をしたのです。幼子、母親、父親のような姿勢を持つことはまず伝道者である牧師が持つべき姿勢です。神がまず説教を語る牧師に語っておられることを覚えます。と同時に、神は信徒一人ひとりにも語っておられます。私たちの教会が幼子のような謙遜と母親のような愛と父親のような教えをもって、互いの交わりを深めましょう。それは私たちが目指すべき福音の証しの姿勢であり、互いに仕え合う姿勢です。今週も、神の国と栄光にあずかるようにと召してくださる神にふさわしく歩んでいきましょう。

Ⅰテサロニケ２章１３－１６節「神のことばを信じる」

１．神のことばを信じる １３

パウロは1:2で、テサロニケ教会のために祈る時、いつも神に感謝していると述べました。そして、2:13ではその感謝の理由として、パウロが語った福音をテサロニケ教会が受け入れ信じたことを挙げています。【13こういうわけで、私たちもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。】

テサロニケ人がパウロから聞いた「神のことば」とは、具体的には「神の福音」のことです。2:2でパウロは【私たちの神によって勇気づけられて、激しい苦闘の内にも神の福音をあなたがたに語りました】と言っています。使徒17:3には、パウロのテサロニケ伝道でのメッセージが記されています。【「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスことキリストです」と説明し、また論証した。】パウロは、十字架の死と復活によって救いを成し遂げられたイエスこそキリスト救い主だと宣べ伝えたのです。そしてこの神の福音を聞いた時、信じた人たちは、それを人間のことば、すなわち数ある人間の教えの一つとして聞いたのではありませんでした。そうではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れたのです。すなわち、彼らはパウロの語る福音を自分に対する個人的な神のことばとして受け入れました。

「受け入れる」という言葉は「歓迎する」という意味のことばです。彼らはキリストの死と復活による救いのメッセージを心を開き歓迎して受け入れました。それは同時に、イエスを自分の個人的な救い主として歓迎して受け入れたのです。さらに「信じているあなたがた」とあるように、「受け入れる」とは「信じる」ことです。彼らは神の福音を信じ、福音が解き明かすイエスを自分の個人的な救い主として信じたのです。その時から、神のことばは彼らの内に働き始めました。

【この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。】「働く」というギリシャ語はエネルギーの語源となる言葉です。神のことばは信じる者のうちに神の力をもって働くのです。その結果、神のことばを信じる者は、イエスの十字架の贖いを受けて救われ、新生します。Ⅰペテロ1:23【あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。】さらに、彼らは新しく造られた者として、新しい人生を始めました。彼らは救われた結果、1:9,10にあるように【偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、御子が天から来られるのを待ち望むようになった】のです。

パウロはこのようにテサロニケの兄弟姉妹が神のことばを受け入れて信じ、救われたことを神に感謝しました。なぜなら、彼らが信じることができたのも神のみわざだったからです。パウロが宣べ伝えた福音を聖霊が解き明かし、彼らが心を開いてイエスを救い主と信じることができるように聖霊が助けてくださったのです。

私たちも、私の罪を赦すためにイエスが身代わりに神のさばきを受けて死んでくださったと聞いた時、そのことばを神のことばとして信じ受けて入れることができました。そして、その時から神のことばは私たちの内にも働いて私たちを救い、信仰の成長をするために今日も働き続けています。この神の救いの恵みに心から感謝　しましょう。

２．信じる者の苦しみ １４

イエスを救い主と信じると苦しみや悲しみがなくなるかというとそうではありません。それなら信じる意味がないではないかと思う人もいるかもしれませんが、決してそうではありません。イエスを信じると苦しみにまさる喜びや平安や感謝が与えられます。さらには永遠のいのちが与えられ、死に対する解決を持ち、天国の確かな希望をもって生きることができるのです。1:6には【あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちに、そして主に倣う者になりました】とあります。テサロニケのクリスチャンは多くの苦難の中でも、聖霊による喜びをもって信仰生活を過ごしたのです。さらに14節では、テサロニケ教会は迫害に苦しむユダヤの諸教会に倣う者となったと教えられています。

【兄弟たち。あなたがたはユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会に倣う者となりました。彼らがユダヤ人たちに苦しめられたように、あなたがたも自分の同胞に苦しめられたからです。】ユダヤの諸教会もテサロニケ教会と同じようにキリスト・イエスのある教会です。すなわちイエスの救いと支配の中にあるキリストの教会です。エルサレムをはじめとするユダヤの諸教会はユダヤ人による迫害に会いました。ステパノの殉教から始まったエルサレム教会への激しい迫害の結果、使徒たち以外の信徒はユダヤとサマリアに散らされていきました。そしてその地で福音を宣べ伝え、新たに教会が誕生するとその教会もユダヤ人による迫害を受けました。ユダヤの諸教会は迫害の苦しみの中でも互いに励まし合い信仰に励み福音を宣べ伝え続けたのです。

一方、テサロニケの教会も誕生当初から迫害に会いました。【あなたがたも自分の同胞に苦しめられたからです】とありますが、ここでの「同胞」の意味は民族的な意味ではなく、同じ地域に住む人たちのことです。彼らはテサロニケに住むユダヤ人による迫害を受けました。さらにはテサロニケに住むギリシャ人による迫害も受けたのではないかと思われます。彼らは迫害に苦しむユダヤの諸教会に倣おうと思ったわけではありませんが、結果としてユダヤの諸教会に倣う者となりました。テサロニケ教会だけが迫害に苦しんだのではなかったのです。ユダヤの諸教会もその前からずっと苦しみの中にいたのです。そしてその苦しみは、彼らがキリスト・イエスの救いの中にある証拠でもありました。

イエスはヨハネ15:20で言われました。【人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたも迫害します。】パウロもⅡテモテ3:12で言いました。【キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。】またイエスはマタイ5:11､12で言われました。【わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。 喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。】

私たちは、今日当時のクリスチャンのような迫害に会っていません。しかしクリスチャンであるゆえに、様々な試練にあうかもしれません。そのような信仰のゆえの苦しみにあったならば、自分はイエスの救いにあずかる神の民であることの幸いをかみしめ、主にあって喜びましょう。そしていよいよ主を信じ、主を証しする者となりましょう。

３．信じない者へのさばき １５－１６

パウロはここで神のことばを信じないユダヤ人に対する神のさばきを語っています。15—16節【15ユダヤ人たちは、主であるイエスと預言者たちを殺し、私たちを迫害し、神に喜ばれることをせず、すべての人と対立しています。16彼らは、異邦人たちが救われるように私たちが語るのを妨げ、こうしていつも、自分たちの罪が満ちるようにしているのです。しかし、御怒りは彼らの上に臨んで極みに達しています。】ユダヤ人は神が遣わされた預言者たちを殺し、ついには主であるイエスを十字架に付けて殺しました。さらにイエスから遣わされた使徒たちを迫害しました。これらはすべて神が喜ばれない罪です。また彼らは自分たちがイエスを信じないばかりか、パウロたちが福音を語るのを妨げ、異邦人が救われるのを妨害しました。こうして神に敵対するばかりか、すべての人と対立し、自分たちの罪が満ちるようにしているのです。その結果、神の怒りは彼らの上に臨んで極めまで達しているのです。

パウロはここでイエスを信じず、パウロの伝道を妨げるユダヤ人を厳しく断罪していますが、なぜパウロはこのような厳しいことばを語っているのでしょうか。それはテサロニケ教会が自分で復讐するのではなく、神のさばきにゆだねることを教えるためでした。ローマ14章には迫害する者に対するクリスチャンの態度がいくつも教えられています。14:14【あなたがたを迫害する者たちを祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません。】14:19【愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。「復讐はわたしのもの。わたしが報復する。」主はそう言われます。】14:21【悪に負けてはいけません。むしろ、善をもって悪に打ち勝ちなさい。】イエスもマタイ5:44で言われました。【自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。】

パウロはこの箇所でユダヤ人を断罪し、神の怒りとさばきを述べていますが、一方ローマ9章では、同胞ユダヤ人に対する深い愛も語っています。【9:2-3私には大きな悲しみがあり、わたしの心には絶えず痛みがあります。私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。】さらに10:1では【私の心の願い、彼らのために神にささげる祈りは、彼らの救いです。】パウロは同胞ユダヤ人が救われるためなら、自分がのろわれた者となってもいいとまで言って、彼らの救いのために祈っていたのです。パウロ自身も以前はイエスを信じず、クリスチャンを迫害していた張本人でした。しかし、一方的な神の恵みによって、イエスを救い主と信じることができ、さらにはイエスの福音を宣べ伝える使徒となりました。だからこそ、イエスを信じず、伝道を妨害するユダヤ人の罪の大きさを知るとともに、自分が救われたように、彼らも救われるようにと祈ったのです。

イエスを信じず神に敵対する者には、ユダヤ人であっても異邦人であっても神の怒りが臨みます。一方、ユダヤ人であっても異邦人であっても、自分の罪を悔い改め福音を信じ、イエスを救い主として心に受け入れる者は救われるのです。神のことばを信じる者はみな救われます。ですから神のことばを信じましょう。また神のことばは信じる者のうちに働いてキリストにある成長を与えます。神のことばによって救われ、成長する恵みに感謝して今週も歩みましょう。

Ⅰテサロニケ２章１７－２０節「主イエスの再臨の時」

１．神の家族の結びつき １７

今日の箇所は、ユダヤ人の妨害により、テサロニケ教会から引き離されたパウロが、再び会いたいと切に願う思いが記されています。【17兄弟たち。私たちは、しばらくの間あなたがたから引き離されていました。といっても、顔を見ないだけで、心が離れていたわけではありません。そのため、あなたがたの顔を見たいと、なおいっそう切望しました。】

パウロのテサロニケ伝道は、町のユダヤ人の反対にあい、続けることができなくなり、短期間で終了せざるを得なくなりました。その後パウロはベレヤ、アテネでの伝道を行い、コリント伝道の最中にこの手紙を書いています。【私たちは、しばらくの間あなたがたから引き離されていました】とパウロは言っていますが、「引き離される」という言葉は「孤児になる」という意味があります。日中国交 50 周年の今年、残留孤児となった人たちが、日本に帰国し親と再会した出来事が、改めて報道されていました。戦争終結により、親と引き離された孤児たちの親を思う気持ちは何年たっても変わることはなかったでしょう。

パウロがこの「引き離される、孤児になる」という言葉を使った背景には、パウロとテサロニケ教会との深い結びつきがありました。2:7—8 ではパウロは「自分の子どもを養い育てる母親のようにあなたがたのことをいとおしく思っています。

…あなたがたが私たちの愛する者となったからです」と言いました。また 2:11-12 では「自分の子どもに向かう父親のように…厳かに命じました」と言いました。パウロとテサロニケ教会はともに主イエスを信じた結果、神の家族となり、主にある兄弟姉妹となったのです。パウロが「兄弟たち」と呼びかけるのも、神の家族としての深い結びつきを表しています。それゆえ、パウロがテサロニケ教会を去らなければならなかったことは、まさに引き離されて、孤児のようになった思いだったのです。

しかし、パウロは続けて言います。【といっても、顔を見ないだけで、心が離れていたわけではありません。】パウロは祈りを通して、からだは離れていても心は決して離れていなかったのです。しかし、日々祈って心がテサロニケ教会と共にあるからこそ、なおさら会いたいという願いが募ったのです。そこで【そのため、あなたがたの顔を見たいと、なおいっそう切望しました】と言うのです。「切望した」という言葉は激しく願うという意味の言葉です。

私たちもイエスを信じてクリスチャンとなった時、教会に集う一人ひとりと神の家族としての強い結びつきを持つ者となりました。コロナの影響で、一時的に教会に集えない期間がありました。その時、私たちも「しばらくの間引き離された」という経験をしました。今もコロナ収束に至らず、コロナ前のような交わりを持つことができていません。教会に集うのが当たり前ではなく、特別な神の恵みであることを改めて覚えました。一方、私たちも祈り合うことを通して「からだは離れていても心は決して離れていなかった」ということも経験しました。祈りを通しての交わりも神の恵みであり、クリスチャンの特権です。そして祈ることによって、実際に会う時の交わりも深められていくのです。「私たちは御国の世継ぎ、御子イエスとともに、私たちは神の家族、私たちは一つ」という賛美があります。ともに御国の世継ぎとされ、一つの神の家族とされたこの交わりを、これからも大切にし、兄弟姉妹とともに信仰生活を歩んでいきましょう。

２．サタンの妨げ １８

【 それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。私パウロは何度も行こうとしました。しかし、サタンが私たちを妨げたのです。】パウロはテサロニケ教会の兄弟姉妹と会いたいと切望しただけではなく、実際に行く計画を何度も立てました。【私パウロは何度も行こうとしました】と自分の名前を入れて繰り返して書いているのには理由があったと考えられます。それはパウロの伝道を妨害するテサロニケのユダヤ人たちが、テサロニケのクリスチャンにパウロの悪口を言っていたことが考えられます。その悪口とは、パウロはテサロニケのクリスチャンを見捨てたのだということです。パウロは迫害が起こると自分だけ逃げて、テサロニケのクリスチャンを置き去りにした。だからパウロの教えなど信じるに足りないと言っていたのではないでしょうか。そのようなうわさがパウロのもとにも届いていた中で、パウロはそうではないことをここで伝えているのです。

そして、計画したテサロニケ訪問が果たせなかった理由を述べています。それが【しかし、サタンが私たちを妨げたのです】ということです。具体的な出来事が書いていないので、何がパウロの訪問の妨げとなったのかは分かりません。パウロに反対するユダヤ人たちがパウロが町に入れないように、絶えず見張っていたのかもしれません。あるいは、病によって行けなかったのかもしれません。コリントからテサロニケまでは 500 キロの距離があるので、パウロの体力がもたない状態だったのかもしれません。いずれにしてもパウロは自分がテサロニケに行って教会を励ますことは、神の働きを進めるためにも必要なことでした。しかしパウロの願いどおりにならならなかったのです。そしてその背後にサタンの妨げがあったとパウロは断言しているのです。

しかし、サタンの妨げは神の働きを中断させることはできません。サタンの働きは神の支配下にあり、神はパウロに別の方法を示し、その結果、神の働きはさらに前進したのです。一つの方法は、3:2にあるように、パウロはテモテを自分の代わりに遣わし、テモテを通して必要なことを教え、テサロニケ教会の様子を知ることができました。もう一つは、手紙を通して、テサロニケ教会にパウロ自身が教えたことです。もし、パウロがサタンの妨げにあわず、テサロニケを訪問していたなら、2つのテサロニケ人への手紙はなかったでしょう。そうすると、新約聖書にこの二つの手紙は入っておらず、私たちはこの手紙を読むこともできなかったのです。しかし、パウロはテサロニケに行けなかった結果、これらの手紙が書かれ、聖書に入れられ、私たちを初めすべての人がこの手紙を読んで、神と神のみこころを知ることができるようになったのです。サタンは神の働きを妨害します。しかし、神の働きを止めることはできません。ローマ8:28にあるように｢神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となる｣のです。

私たちも教会の働きを進めようとしたり、伝道しようとする時に、思うように行かないことがあるかもしれません。その背後に、サタンの妨げがあることを今日の箇所から教えられます。しかし、サタンの妨げさえも用いて益とする神のみわざがあることを覚える時、私たちはどんな妨げにあってもがっかりすることなく、その時にできることを忠実に行えばよいのです。なぜなら私たちの神は、すべてのものを治めておられる主権者であり、全能の神だからです。

３．主イエスの再臨の時 １９－２０

新約聖書を読む時に、初代教会は主イエスの再臨を大変身近に覚えていたことを知ります。テサロニケ教会も1:10で「御子が天から来られるのを待ち望むようになった」と記されているように、主の再臨を待ち望む信仰は、彼らの信仰の中心にありました。そして19節でもパウロは主イエスの再臨の時に起こることを記しています。【19私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのは、いったいだれでしょうか。あなたがたではありませんか。】今はテサロニケの兄弟姉妹と会えない。しかし、主の再臨の時には会えると言って、主の再臨を大変身近なこととして語っています。私たちも主イエスの再臨を信じています。使徒信条でも「そこから来られて、生きている者と死んでいる者とをさばかれます」と告白します。しかし、初代教会と私たちでは、主は間もなく来られるという緊迫感が違うのではないかと思います。私たちもこの点は初代教会に倣い、再び来られる主を待ち望む信仰に堅く立ちましょう。

さて、パウロは主の再臨の時に、テサロニケの兄弟姉妹とともに御前に立つ時、彼らは「私たちの望み、喜び、誇りの冠となる」と言っています。冠という言葉は、当時のスポーツ競技の勝利者に与えられる月桂樹の冠を表す言葉です。冠を頭にかぶせられる時、その人は「これこそ私の望み、喜び、誇りの冠です」と思ったことでしょう。パウロも同じように主の再臨の時には、ともに御前に立つテサロニケ教会が「私たちの望み、喜び、誇りの冠となる」と言っているのです。英語で子どもをほめる時に、I am proud of youと言います。「私はあなたを誇りに思う。あなたは私の誇りだ」という意味です。日本語の「あなたは私の自慢の子どもだ」というような意味です。パウロは主の御前でテサロニケ教会は自分の誇りとなると言っているのです。

さらに、主の再臨の時だけでなく、現在もそうだと20節で言います。【20あなたがたこそ私たちの栄光であり、喜びなのです。】栄光という言葉は、聖書協会訳では「誉れ」と訳されており、誇りと言い換えることも可能です。すなわち、パウロにとってテサロニケ教会は、主の再臨の時に、パウロの誇りであり、喜びとなるだけでなく、今現在もパウロにとっての誇りであり喜びであるのです。そして、このことはテサロニケ教会だけでなく、すべての教会、すべてのクリスチャンに対して言えることでもあります。

私たちも主の再臨の時に御前に立つ時、共に信仰生活を送って来た波崎キリスト教会の兄弟姉妹を、私の望み、喜び、誇りの冠とするのです。「ともに信仰生活を過ごした兄弟姉妹は私の誇りです」と主の御前に伝えることは私たちにとってどんなに大きな喜びでしょうか。そして、私たちにとってもこのことは主の再臨という未来のことだけでなく、現在もそうなのです。私たちは今はまだ、救いの未完成の段階であり、欠けだらけです。互いの欠点を見ることもあるでしょう。それでも私たちは主を信じ、主に頼り、様々なサタンの妨げの中でも、神の栄光のために歩んでいます。その信仰者としての歩みは互いに誇りであり喜びです。私たちは、互いの存在を喜び、誇りに思いつつ、これからも信仰生活に励みましょう。私たちの前には信仰生活を妨害するサタンの働きがあります。しかし、主権者なる神は、それさえも用いて益としてくださいます。その主に信頼して、主イエスの再びこの世に来られる時を待ち望みつつ、主のわざに励みましょう。

Ⅰテサロニケ３章１－５節「信仰の励まし」

１．信仰の励まし １－３a

今日の箇所はパウロがアテネからテモテをテサロニケ教会に派遣したことから始まります。パウロのテサロニケ伝道は、ユダヤ人による迫害が起こり、パウロは誕生まもないテサロニケ教会をおいて、町を去らなければなりませんでした。その後ベレヤで伝道したパウロのもとにも、テサロニケのユダヤ人がやって来て伝道の妨害をしました。そこでパウロは次の伝道地アテネに行きました。しかし、パウロの心には迫害下にあるテサロニケ教会のことが絶えずあり、何とかしてもう一度テサロニケに行って、兄弟姉妹を励ましたいと願いました。しかし、サタンの妨げにあってパウロはどうしてもテサロニケに戻ることができません。そこで、パウロは自分の代わりにテモテを遣わして、テサロニケ教会の様子を知り、必要な励ましを与えようとしたのです。そのことが1-2aに記されています。【1そこで、私たちはもはや耐えきれなくなり、私たちだけがアテネに残ることにして、2私たちの兄弟であり、キリストの福音を伝える神の同労者であるテモテを遣わしたのです。】

パウロはテモテのことをまず「私たちの兄弟」と呼んでいます。第2次伝道旅行からパウロと行動を共にしたテモテは、同じ主イエスを信じるゆえに、主にある兄弟でした。クリスチャンは主イエスを信じて、父なる神の子どもとされた結果、主にある兄弟姉妹となりました。アメリカの神学校で学んでいた時に、知らない学生から「hi,brother」「こんにちは、兄弟」と挨拶された時、クリスチャン同士の挨拶は英語でこのように言うのかと知り、新鮮な思いを持ったことを覚えています。イエスを信じる者はどの国の人であっても、同じ神の家族の一員として兄弟姉妹なのです。

次にパウロはテモテのことを「キリストの福音を伝える神の同労者」と呼んでいます。「キリストの福音」は、今まで「神の福音」、「私たちの福音」とも呼ばれてきました。神の福音はキリストの救いの福音なので、キリストの福音です。またこの福音を信じた時、私たちの福音となるのです。また「神の同労者」とは「神のために働く同労者」という意味です。神のために働く同労者として、パウロもテモテもキリストの福音を伝えていました。私たちも「キリストの福音を伝える神の同労者」として、神からこの世に遣わされているのです。

次にパウロがテモテをテサロニケ教会に遣わした理由が記されています。【2bあなたがたを信仰において強め励まし、3aこのような苦難の中にあっても、だれも動揺することがないようにするためでした。】「このような苦難の中にあっても」とあるように、テサロニケ教会は町のユダヤ人による迫害に会っていました。その後、町のギリシャ人からの迫害も始まったと考えられます。人間は弱いもので、苦難にあうとだれでも動揺します。動揺すると、信仰が揺さぶられ、確信を失い、信仰から離れてしまう可能性もあります。第3の点で学びますが、それこそサタンの思うつぼです。そのようなことがないように、彼らの信仰を励ますためにパウロはテモテを遣わしたのです。

「あなたがたを信仰において強め励まし」とはテサロニケのクリスチャンの信仰を強め励ますことです。「強める」という言葉には「しっかり固定する」という意味があります。岩なるイエスに信仰の錨を降ろし、しっかり固定すれば、迫害の波風が激しくても動揺することがありません。テモテは、彼らの信仰が強められるように、彼らのために祈り、必要なみことばの教えを伝えたのです。また「励ます」という言葉は聖霊の呼び名である「助け主」と同じ語源の言葉で、励ます、慰める、助けるという意味があります。テモテはテサロニケのクリスチャンとじかに会って、苦難の状況を聞き、励まし、慰め、必要な助けを与えたのでした。

このようなパウロのもとで行われたテモテによる信仰の励ましは、今日も苦難の中にある兄弟姉妹に対して必要なことです。私たちの兄弟姉妹が試練の中にあり、苦難に会っている時には、その人の信仰を励ます働きが必要です。その人のところに行き、状況を聞き、その人のために祈り、励ましのことばを伝えることができれば、その人はどんなに励まされることでしょうか。コロナ下では訪問して人とお会いすることが困難な状況が続きましたが、そのような時でも電話や手紙やメールなどを用いて、励ますことは可能です。私たちも互いに励まし合うことを大切にしていきましょう。

２．苦難の意味 ３b－４

パウロはキリストの福音を信じたテサロニケ人クリスチャンに対して、イエスを信じる者は苦難にあうように定められていると、あらかじめ伝えていました。そしてそのとおりになったと言っています。【3bあなたがた自身が知っているとおり、私たちはこのような苦難にあうように定められているのです。4あなたがたのところにいたとき、私たちは前もって、苦難にあうようになると言っておいたのですが、あなたがたが知っているとおり、それは事実となりました。】

第1次伝道旅行でも、パウロは激しい迫害に会い、リステラではパウロが死んだと思うほどの石打ちに会いました。しかし、町の外に引きずり出された後、パウロは立ち上がり再び伝道しました。そしてクリスチャンになった人々に対して、「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない」と言って、彼らの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧めました。パウロは第2次伝道旅行でのテサロニケでも、キリストの福音を信じたクリスチャンに対して同じように、「私たちはこのような苦難にあうように定められている」と伝えていたのです。

パウロが「私たちはこのような苦難にあうように定められている」と言うように、クリスチャンが信仰ゆえの苦難に会うことは想定外ではなく、むしろ定められているのです。もちろん、すべてのクリスチャンが、初代教会が受けたような厳しい迫害を受けるわけではありません。今日の日本では、クリスチャンだからということで、迫害を受けることはほぼありません。しかし洗礼を受けることを家族から反対されたり、信仰を守るために苦労をすることはあるでしょう。一方、キリシタン時代には厳しい迫害が日本でも起こりました。今日の世界に目を向ければ、７６か国３億６千万人のクリスチャンが迫害下にあるということです。実に７人に一人のクリスチャンが信仰ゆえの迫害に会っているのです。

しかしなぜイエスを信じると迫害に会うのでしょうか。それは私たちの信じるイエスご自身が迫害に会い、十字架で死なれたからです。イエスはヨハネ15:20で弟子たちに言われました。「人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたも迫害します。」主であるイエスが迫害されれば、イエスに従うイエスの弟子も迫害に会うのです。しかし、クリスチャンのゴールは苦難ではありません。イエスが苦難を通して栄光に入られたように、私たちも苦難を通して栄光に入るのです。ですから苦難は栄光に入るための過程、プロセスなのです。ローマ8:17「私たちはキリストと、栄光を共に受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」キリストと栄光を共に受けるために苦難をともにしている ！これがクリスチャンが苦難を受ける目的です。そのことを覚えるなら、クリスチャンが苦難に会うように定められているというみことばは、私たち信仰の慰めまた励ましとなるのです。

ですから、信仰ゆえにつらいことを経験した時には、これは想定内ことであり、キリストと栄光を共に受けるために苦難をともにしているのだと理解しましょう。そして主の慰めと励ましをいただきましょう。

３．誘惑する者 ５

【そういうわけで、私ももはや耐えられなくなって、あなたがたの信仰の様子を知るために、テモテを遣わしたのです。それは、誘惑する者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦が無駄にならないようにするためでした。】５節では1節2節で述べたことを再び言って、テモテを遣わした思いを述べています。そして、その目的としてここでは【誘惑する者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦が無駄にならないようにするためでした】と付け加えています。「誘惑する者」とは2:18で述べたサタンのことです。サタンすなわち悪魔は、パウロがテサロニケに行くことを妨げるとともに、テサロニケのクリスチャンの信仰を迫害によって揺さぶり、信仰から離れさせようと誘惑しました。

サタンを「誘惑する者」と呼ぶことは、イエスの荒野の試みの箇所にも出てきます。マタイ4:3では悪魔を「試みる者」と呼んでいます。脚注を見ると「別訳:誘惑する者」とあり、原語では1テサロニケ3:5の「誘惑する者」と同じ言葉です。イエスの荒野の試みでは、悪魔はイエスを誘惑しました。その誘惑に対してイエスは3回とも神のことばをもって悪魔を退けたのです。

テサロニケ教会も、サタンの誘惑に負けずに、苦難の中でも信仰を守り通し、さらには成長し、ギリシャ各地の教会への信仰の模範となりました。パウロはテサロニケから戻って来たテモテから彼らの信仰の様子を聞き、心から感謝しました。ではテサロニケ教会が悪魔の誘惑に打ち勝った理由は何だったでしょうか。それはイエスと同じように、神のことばによって悪魔の誘惑に打ち勝ったのです。すでに学んだ2:13にはこうあります。【この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。】テサロニケの兄弟姉妹はパウロが去った後も、パウロから教えられた神のことばを信じ、神のことばに励まされ、神のことばに従って歩みました。その結果、彼らの信仰は神のことばによって成長し、神のことばによって悪魔の誘惑に打ち勝ち、信仰を守り通すことができたのです。

このことは私たちのとっての励ましでもあります。Ⅰペテロ5:8—9にはこうあります。【身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に対抗しなさい。ご存じのように、世界中で、あなたがたの兄弟たちが同じ苦難を通ってきているのです。】悪魔の誘惑、試みは、イエスご自身が経験し、歴史の中で、世界中で多くの主にある兄弟姉妹が経験し、同じ苦難を通ってきました。そして、悪魔の誘惑に打ち勝って来たのです。「堅く信仰に立って、この悪魔に対抗しなさい」とありますが、堅く信仰に立つことは、神のことばに堅く立つことです。悪魔に対抗するための神の武具としての神のことばを取ることです。そして、神のことばを取るとは、神のことばを信じ、神のことばに従うことです。そうすれば私たちも悪魔の誘惑を退け、主の助けと励ましをいただきながら、信仰生活を歩み続けることができるのです。信仰生活には時には私たちを試み誘惑する苦難の波風が押し寄せることがあります。けれども神のことばに堅く立ち、互いに励まし合えば、私たちの信仰は強められ、堅く信仰に立って歩むことができます。今週も神のことばに堅く立ち、主に従っていきましょう。

Ⅰテサロニケ３章６－１０節「主にある交わり」

１．励まし合う交わり ６－８

パウロはテサロニケで伝道した時、ユダヤ人の妨害に会い、町が混乱した結果、生まれたばかりのテサロニケ教会を置いて、去らなければなりませんでした。その後ベレヤで伝道している時も、テサロニケのユダヤ人がやって来てパウロの伝道を妨害したため、パウロは次の伝道地であるアテネにやって来ました。しかし、パウロの心にはいつもテサロニケ教会のことがあり、何とかテサロニケに戻って、彼らの信仰を励ましたいと願いました。けれどもサタンの妨げにあい、テサロニケに行くことができません。そこでテサロニケ教会の信仰の様子を知り、彼らを励ますために、アテネからテモテを遣わしました。その間、パウロはアテネからコリントにやって来て、コリント伝道を始めていました。そこにテモテがテサロニケから良い知らせを持って帰って来たのです。今日の箇所はテモテが持って来た良い知らせと、それを聞いたパウロの反応が記されています。

【ところが今、テモテがあなたがたのところから私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせを伝えてくれました。また、あなたがたが私たちのことを、いつも好意をもって思い起こし、私たちがあなたがたに会いたいと思っているように、あなたがたも私たちに会いたがっていることを知らせてくれました。】【ところが今、テモテがあなたがたのところから私たちのもとに帰って来て】とあるように、パウロはこの手紙を、テモテが戻って来て間もなくして書いたことが分かります。テモテがパウロに持って来た良い知らせは大きく二つありました。一つは彼らの信仰と愛についての良い知らせです。パウロはテサロニケの兄弟姉妹が急に霊的指導者を失い、苦難の中で悪魔の誘惑に会って動揺し、信仰が弱っているのではないかと心配していました。しかし、そのような心配は取り越し苦労に終わりました。彼らはイエスを信じる信仰から離れることなく、むしろしっかりと主につながり、神のことばによって信仰の成長をしていたのです。また彼らは苦難の中でも互いに励まし合い、愛の奉仕に励んでいました。

もう一つの知らせは、パウロがテサロニケの兄弟姉妹に会いたいと思っているように、彼らもパウロに会いたがっているということです。離れていても主にある交わりは変わらず続いていたのです。それは、それぞれが同じ主イエスを信じていたからです。もしテサロニケ教会が主から離れていれば、パウロと会いたいとは思わなかったでしょう。テサロニケ教会が主にしっかりとつながっていたので、福音を伝えてくれたパウロを慕い、パウロと会って交わりを深め、みことばの養いを受けたいと願ったのです。

この良い知らせを聞いたパウロは、彼らの信仰によって大変励まされ、慰められました。【7こういうわけで、兄弟たち。私たちはあらゆる苦悩と苦難のうちにありながら、あなたがたのことでは慰めを受けました。あなたがたの信仰による慰めです。】「私たちはあらゆる苦悩と苦難のうちにありながら」とあるように、パウロは伝道する先々で妨害や反対、そして迫害を受けて、あらゆる苦悩と苦難の内にありました。そのような中でも、パウロはテサロニケ教会の苦難を覚え、彼らの信仰を強め励ますためにテモテを送ったのです。そして、テモテから彼らの信仰と愛を聞いて、逆にパウロが慰めを受けたのです。7節の「慰め」という言葉は、原語では3:2の「励まし」と同じ言葉です。この言葉は励まし、慰め、助けを意味します。パウロはテサロニケ教会を励まし、慰め、助けようとしましたが、彼らの信仰を聞いて逆に励まされ慰められ、助けられたのです。

【あなたがたが主にあって堅く立っているなら、今、私たちの心は生き返るからです。】テサロニケの兄弟姉妹は、主にあって堅く立っていました。それが彼らの信仰です。主にあってとは、主の中にという意味で、彼らは主イエスの救いの中に、主の支配の中に、主の使命の中に堅く立っていました。そのような信仰の歩みをしていることを知った時、パウロの心は生き返りました。パウロも人間ですから、苦悩と苦難の中で気落ちすることがありました。しかし、テサロニケの兄弟姉妹の信仰を聞いた時、パウロは慰められ、励まされ、勇気づけられて元気を回復するという助けを得たのです。

私たちはどうでしょうか。私たちは自分が苦悩と苦難の中に置かれると、人のことまで考えられず、自分のことで精いっぱいになってしまうかもしれません。しかしそのような時にも周りに目を向けて、同じように大変な中にいる人がいるならば、その人のところに行って、慰め、励まし、助けるようにしたらどうでしょうか。そうすれば、不思議なことに逆に自分も慰められ、励まされ、助けられることがあるのです。これが主にある交わりのすばらしさです。慰めや励ましや助けは一方通行ではなく、相互に与えられるのです。励まし合う交わり、これが主にある交わりの第1の特徴です。励まし合う交わりを私たちは教会で持って行きましょう。

２．感謝と喜びの交わり ９

第2の主にある交わりの特徴は感謝と喜びの交わりです。【9あなたがたのことで、どれほどの感謝を神におささげできるでしょうか。神の御前であなたがたのことを喜んでいる、そのすべての喜びのゆえに。】パウロはテサロニケの兄弟姉妹が、信仰と愛にしっかりと立って歩んでいることを知った時、自分のことのように喜びました。新改訳第3版では先ほどの8節は「あなたがたが主にあって堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります」と訳しています。この訳もパウロの思いを表していると思います。パウロにとっての生きがいは、福音を信じた人たちが救われるだけでなく、主にあって堅く立ち、信仰の成長し、主のために生きることです。そのために、パウロはまさに命がけで働いたのです。どんなに迫害に会ってもそれにめげず、福音を宣べ伝え、教会を建て上げ、信徒にみことばを教えました。ですからパウロにとって、自分が福音を伝えた人たちが、信仰の成長をし、愛の奉仕に励み、福音を伝えていることを聞くことほど、大きな喜びはありませんでした。

そして、その喜びを受けたパウロは「よかった、よかった」と自己満足で終わるのではなく、神への感謝をささげました。「あなたがたのことで、どれほどの感謝を神におささげできるでしょうか」とあります。これはどんなに神に感謝をしてもし過ぎることはないということです。テサロニケ教会の信仰の成長は、人間のわざではなく、ただ神のみわざだからです。パウロが宣べ伝えた神のことばを彼らが信じたので、神のことばは彼らの内に働いて信仰が成長したのです。ですから、神に感謝するということは、神にすべての栄光をお返しするということなのです。パウロはテサロニケ教会の信仰の成長を知った時、励まされ、心が生き返り、喜んだとともに、心から神に感謝しました。

このことは、私たちが喜ぶ経験をする時に、何をすべきかを教えています。それは神に感謝することです。クリスチャンは喜ぶ経験をする時に、「よかった、よかった」で終わってはいけません。この喜びは神が与えてくださった喜びであることを覚え、まず何よりも神に感謝するのです。「神様、ありがとうございます。こんなにすばらしい出来事を与えてくださり、感謝します。すべての恵みはあなたからのものです。あなたに栄光をお返しします」と感謝の祈りをするのです。また、この感謝は主にある交わりの特徴でもあります。「喜んでいる者たちとともに喜び、泣いている者たちとともになきなさい」とあるように、兄弟姉妹の喜びをともに喜び、神に感謝するのです。ローマ12:15 また、教会で起こる喜びの出来事を、ともに喜び、神に感謝するのです。「教会のこの出来事、あの出来事を感謝します」と祈るのです。私たちはこれからも、喜びと神への感謝に満ちる交わりを築いていきましょう。

３．祈りの交わり １０

第3の主にある交わりの特徴は祈りの交わりです。【10私たちは、あなたがたの顔を見て、あなたがたの信仰で不足しているものを補うことができるようにと、夜昼、熱心に祈っています。】パウロの祈りは来週見ます11－13節に続きますが、10節では2つのことを祈っています。一つは「あなたがたの顔を見て」とあるように、テサロニケに行って彼らと会うことができるようにとの祈りです。パウロはテモテからの良い知らせを聞いたことに満足せず、今度は自分が行って直接彼らの顔を見て、交わりを持ちたいと願い祈りました。

もう一つは「あなたがたの信仰で不足しているものを補うことができるように」とあるように、彼らの信仰の成長のために教えることができるようにとの祈りです。そしてパウロはそのことをこの手紙ですぐに実行し、4-5章で彼らの信仰の成長のために必要なことを教えています。「夜昼、熱心に祈っています」とあるように、パウロは日々熱心にテサロニケ教会のために祈りました。このパウロの祈りはこの手紙を書く前からずっと行われていました。遠く離れていても祈ることはできます。そして、その祈りは答えられ、テサロニケ教会は主にあって堅く立ち、信仰と愛において成長したのです。また彼らもパウロを慕い、パウロのために祈ったのです。

この祈りこそ教会の交わりの特徴です。私たちが救われるために、私たちが知らない所で、だれかが祈っていてくれたのです。また私たちが信仰生活を続けていくためも、いろんな人が祈ってくれているのです。私自身がイエスを信じてクリスチャンになった時には、自分のために祈ってくれていた人がいたことに気づきませんでした。しかし、クリスチャンになりさらに牧師になって、他の人のために祈るようになると、自分がイエスを信じるために、いろんな人が祈ってくださっていたことを知るようになりました。私たちがイエスを信じることができたのは、神の助けがあったとともに、人々のとりなしの祈りを神が聞いてくださったからなのです。また私たちが今まで信仰を保ち、一歩ずつ成長し、教会の交わりにつながり、奉仕を続けることができるのも、多くの人の祈りがあるからなのです。そのことを思う時、神に感謝するとともに、自分も他の人のためにもっと祈ろうと励まされます。

互いのためにとりなし祈る時、私たちは神を通して、互いにつながることができます。どんなに離れていても、祈りによる交わりを持つことができるのです。そして、互いに祈り合うことによって、喜びを共にし、悲しみも共にして、励まし合い慰め合うことができるのです。祈り合うことは、神がクリスチャンに与えられた特権です。この特権を生かして互いに祈り合う主にある交わりを築いていきましょう。

Ⅰテサロニケ３章１１－１３節

１． 私たちの道 １１

今日の箇所はパウロの祈りです。パウロはテサロニケ教会のことを覚えて、ここで3つの祈りをしています。第1の祈りはパウロがテサロニケ教会に行くことができるように道を開いてくださいという祈りです。先週の箇所では、パウロはテサロニケから戻って来たテモテから、テサロニケ教会の信仰と愛についての良い知らせを聞き、喜びつつ神に感謝しました。そして、10節で【私たちは、あなたがたの顔を見て、あなたがたの信仰で不足しているものを補うことができるようにと、夜昼、熱心に祈っています】と言いました。パウロは、テモテからの朗報に喜びつつ、さらに自分もテサロニケ教会を訪問して、直接彼らに信仰の励ましを伝えたいと願い、そのことを熱心に祈ったのです。11節はその祈りが記されています。【11どうか、私たちの父である神ご自身と、私たちの主イエスが、私たちの道を開いて、あなたがたのところに行かせてくださいますように。】

ここでまず注目したいのは、父なる神と主イエスの関係です。この文章の主語は｢私たちの父である神ご自身と、私たちの主イエス｣で、述語は｢開く｣です。英語でもそうですが、新約聖書の原語のギリシャ語は、主語が複数の場合は、動詞も複数形となります。ですから文法的には、主語が父なる神と主イエスの複数ですから、動詞の｢開く｣は複数形でなければなりません。けれどもここでの｢開く｣は単数形が用いられています。これは父なる神と主イエスは一人の神であることを表しているのです。ヨハネ10:30でイエスは「わたしと父とは一つです」と言われました。その意味はイエスと父なる神は別々の人格(位格)を持つ神でありつつ、一人の神であるということです。聖書は父、子、聖霊の神はそれぞれ別々の人格を持つ神でありつつ一人の神であるという三位一体の神を教えています。パウロは11節の祈りの中でもこのことを記しているのです。

さてパウロは、サタンの妨害によってテサロニケに行くことができません。しかし、だからと言ってあきらめませんでした。なぜなら神のみこころならば、神がテサロニケに行く道を開いてくださることを知っていたからです。ですからパウロは、【11どうか、私たちの父である神ご自身と、私たちの主イエスが、私たちの道を開いて、あなたがたのところに行かせてくださいますように】と祈ったのです。聖書を見ると、この祈りはすぐには聞かれなかったことが分かります。使徒の働き18章を見ると、パウロはこの後、1年6カ月腰を据えてコリントで伝道しました。その後エペソを通り、エルサレムを経てアンティオキアに戻り、第2次伝道旅行を終了しました。そしてしばらくしてから第3次伝道旅行に出発し、エペソで2年以上伝道します。そしてコリントに行く途上、マケドニアに寄り、ついにテサロニケに行くことができたのです。なんとこの祈りから5年後のことです。パウロは神が導かれるままに、行く先々で必要とされる働きにたずさわり、伝道と教会形成に励みました。そして時が満ちて、パウロの祈りはかなえられ、テサロニケにも行くことができたのです。それはパウロの当初の願いとは違ったことでしょうが、神の計画が実現したのでした。パウロは神に祈りつつ、その祈りの答えを神にゆだねて、今なすべきことに励んだのです。

【開いてください】という祈りは、事あるごとに私たちの祈りではないでしょうか。私たちは様々な願いを持ち、自分の道を開いてくださるのは神であると信じて、神に私の道を開いてくださいと祈ります。このように祈ることは大切なことです。そしてこの祈りをしながら、パウロのように祈りの答えを神にゆだね、今なすべきことを忠実に行うことが大切なのです。【道を開いてください】という祈りに対する神の答えは3つあります。一つは「はい」Yesです。神は私たちの願う道を開いてくださいます。二つ目は「いいえ」Noです。私たちの願う道は開かれず閉じられてしまいます。しかし、閉じられることによって、神の道は他にあることを示してくださるのです。三つ目は「待て」Waitです。これはパウロに与えられた答えでした。道は開かれるが、今ではなく将来だ、それまで待たなければならないという答えです。私たちもこのような経験をすることがあります。何年、何十年祈っても開かれないことが、神の時が満ちると開かれることがあるのです。家族の救いの祈りなどはそのようなことがよくあります。だからこそ、私たちはあきらめずに「道を開いてください」と祈り続けることが大切なのです。

２．豊かな愛 １２

第2のパウロの祈りは、テサロニケ教会の愛が豊かになるようにとの祈りです。【12私たちがあなたがたを愛しているように、あなたがたの互いに対する愛を、またすべての人に対する愛を、主が豊かにし、あふれさせてくださいますように。】テサロニケ教会はすでに愛のわざに励んでいました。3:6でテモテはテサロニケ教会の信仰と愛についての良い知らせを伝えました。1:3ではパウロはテサロニケ教会の愛から生まれた労苦を思い起こしていると言っています。けれども愛はこれだけあれば十分というものではありません。これからも絶えず必要です。パウロは彼らの愛を【主が豊かにし、あふれさせてくださいますように】と祈りました。満ちあふれる愛を祈り求めたのです。12節ではまず【私たちがあなたがたを愛しているように】と言って愛の模範を示しています。2:7以降でパウロは自分の子どもを育てる母親のように、また父親のようにあなたがたを愛し、励まし、厳かに命じたと言いました。私たちもパウロのように愛の模範を自分の家族や周りの人に示すことができるようになりたいと願います。

次にパウロはテサロニケ教会が持つべき2つの愛の対象を教えています。一つは教会の兄弟姉妹への愛です。【あなたがたの互いに対する愛】です。迫害の中にある教会は互いに愛し合い、助け合い、励まし合う必要がありました。そしてそのような教会の愛の交わりが周りの人たちへの良き証しとなりました。もう一つは教会の外にいる人たちへの愛です。【すべての人に対する愛】です。その中にはクリスチャンに対して好意を持っている人たちもいるでしょう。そのような人たちを愛することは簡単かもしれません。一方、自分たちを迫害する人たちを愛することは難しいことでしょう。しかし【すべての人に対する愛】には迫害者も入っています。迫害者を愛することも、父なる神と主イエスのみこころなのです。そしてパウロは【主が豊にし、あふれさせてくださいますように】と祈り、主にあって兄弟姉妹だけでなく、すべての人への愛を持つことが可能となると教えているのです。

イエスはマタイ5:44で言われました。「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」このイエスの教えに自分の敵を愛するためのヒントがあります。それは祈ることによって愛を示すことです。自分の敵のため、自分を迫害する者のために祈ることも難しいことでしょう。けれどもそれは主イエスのみこころなのです。祈ることによって神に働いていただくのです。私たちも兄弟姉妹への愛とすべての人への愛を豊かにし､あふれさせて下さるように主に祈りましょう。

３．聖なる者 １３

第3のパウロの祈りは、テサロニケ教会が聖なる者となるようにとの祈りです。【13そして、あなたがたの心を強めて、私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒たちとともに来られるときに、私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように。アーメン。】この祈りは主イエスの再臨の時に備えるようにとの祈りです。【私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒たちとともに来られるとき】とあります。4:13以降には再臨の時の復活の順序が記されています。それによれば、まず主にあって死んだ人がよみがえり、その後生きているクリスチャンが天に引き上げられるとあります。ですからここで言う「主イエスとともに来るすべての聖徒たち」とは先によみがえった人たちのことです。彼らも主ととも、生きている者を迎えに来てくれるのです。そして、すべてのクリスチャンが父なる神の御前に立ちます。これは最後の審判の時です。しかし、恐れる必要はありません。なぜなら私たちの前におられるのは「私たちの父である神」だからです。私たちは主イエスの贖いによって、すべての罪が赦された神の子どもとして御前に立つので、さばきを受けることはありません。神は私たちを新しい天の御国、新天新地に迎え入れて下さいます。

ではクリスチャンは何のために、終わりの時に神の御前に立つのでしょうか。それは報いを受けるためです。私たちは神の前に自分の人生の報告をするのです。神の子どもとしてどのような生涯を歩んだのかを報告します。それに対して神は私たちに報いてくださるのです。「聖である」とは「神のために分ける」という意味があります。神の栄光を現すために自分の人生を聖別することです。「責められるところのない者」ともあります。私たちはイエスを救い主と信じた結果、義と認められたので、神の子どもとしての立場については責められることはありません。また、新天新地に入る時は栄化され、責められるところのない聖なる栄光の姿に変えられます。

ですから、ここで言っているのは義認や栄化のことではなく、聖化の段階でのことです。救われた後どのような信仰生活を歩んできたかということです。自ら神の栄光を現すにふさわしい歩みをしてきたか。罪に背を向け、聖さを求め、自分の人生を神のために聖別してきたか。人の前ではなく、神の前に責められることのない人生を歩んできたかということです。しかし、そのように問われるとだれも自信がないのではないでしょうか。救われても罪を犯すし、失敗はするし、穴があれば入りたいような歩みをしている私たちではないでしょうか。

しかしこのパウロの祈りは、自分の努力で聖であり、責められるところのない者になるようにとの祈りではありません。日本語訳ではわかりにくいですが、13節の主語は12節と同じ「主」です。「主があなたがたの心を強めて…聖であり、責められるところのない者としてくださいますように」という祈りです。クリスチャンの聖化は神の恵みのわざです。主に信頼し、主の助けをいただく中で恵みによって成長し､聖なる者､キリストに似た者に徐々に変えられていくのです。そしてその中で私たちは神に用いられ､神の栄光を現すことができ､やがて神の御前に立つ時に、神の恵みによって与えられた人生の報告をするのです。その時､主は「よくやった。良い忠実なしもべだ」と言って､私たちに報いてくださるのです。ですから､私たちは主によって心を強められ､神の恵みによって成長し､聖なる者に変えられることを祈り求めていきましょう。

Ⅰテサロニケ４章１－８節「神に喜ばれる歩み」

１． 神に喜ばれる歩み １－２

テサロニケ人への手紙第1は、今日の4章から具体的な信仰生活の勧めに入ります。1-2【1最後に兄弟たち。主イエスにあってお願いし、また勧めます。あなたがたは、神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを私たちから学び、現にそう歩んでいるのですから、ますますそうしてください。2私たちが主イエスによって、どのような命令をあなたがたに与えたか、あなたがたは知っています。】

「最後に兄弟たち」という呼びかけは、これで手紙を終えるという意味ではなく、新たなテーマを伝えるという内容の転換を意味しています。そして、これから伝える内容が具体的な信仰生活の勧めです。また「主イエスにあってお願いし、また勧めます」とあるように、これから伝える勧めはパウロの個人的な勧めではなく、主イエスからの勧めです。その勧めが「神に喜ばれるために歩み続けるように」ということです。これはこれからの個々の勧めと土台、原則となる勧めです。「あなたがたは、神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを私たちから学び、」とあるように、テサロニケの兄弟姉妹はパウロが滞在中すでにこのことをパウロから学んでいました。また2節で「あなたがたは知っています」とあるように、パウロが主イエスによって与えた命令を彼らはすでに知っていました。そして「現にそう歩んでいるのですから」とあるように、彼らは学び、知っていることを実行していました。そして「ますますそうしてください」と言って、神に喜ばれる歩みを継続するようにと勧めているのです。

「神に喜ばれる歩み」とは「神に喜ばれる生活」のことです。神に喜ばれるために生きることです。私たちはクリスチャンになる前は、神に喜ばれる生き方をすることなど、全く考えていませんでした。なぜなら、そもそも神を知らなかったからです。その結果、私たちはどのようにしたら自分が喜べるだろうかと考え、自分が喜ぶための人生を歩んでいたのです。そして、そのことを広げ、自分の家族が喜ぶために、また自分の親しい人や自分が関わっている人が喜ぶために、さらには社会の人々が喜ぶためにというように、喜びの範囲を広げていきました。そのこと自体はすばらしいことです。けれども、神に喜ばれるために生きるなど想像もつかなかったのです。

ところがクリスチャンになると｢神に喜ばれるために生きる｣ことが、最大の人生の使命となりました。なぜでしょうか。それは私たちを造られ、私たちを罪の中から救い出してくださったまことの神を知ったからです。私たちの造り主なる神が、私たちを救うためにご自身のひとり子イエスをお与えくださったほど、私たちを愛してくださったことを知った時、私たちも神を愛し、神のために生きていきたいと願うようになったのです。自己中心から神中心の生き方に代わったのです。その結果、どのようにしたら神に喜ばれる歩みができるだろうかと考え、神に喜ばれる歩みをする者に変えられたのです。そして神に喜ばれる生活は、周りの人に喜ばれる生活に繋がり、さらには自分自身も喜ぶ生活へと導かれるのです。

私たちが神に喜ばれる歩みをするためには、まず聖書から神に喜ばれることが何かを学んで知る必要があります。しかし、神に喜ばれることを聖書から学び、知るだけでは十分ではありません。学んで知っただけでは、絵に描いた餅に過ぎず、神に喜ばれる歩みにはなりません。学び知ったことを、実践することが必要なのです。その実践が「歩む」ことなのです。テサロニケ教会は、パウロから学び、知ったことを実践し、現にそう歩んでいました。けれども、現にそう歩んでいるだけでも十分ではありません。パウロは「ますますそうしてください」と勧めています。すなわち、主に喜ばれる歩みを継続することが必要なのです。

信仰生活では私たちがもう十分、学び、知り、実践しましたと言って、そこで止まると、信仰はそれ以上成長せず、停滞します。さらには後退することになるのです。自転車はこいでいる間は前進します。けれども、こぐのをやめるとやがて止まってしまい、足を着かなければ倒れてしまいます。信仰生活も前進していく時に成長しますが、もう十分と思って立ち止まると停滞し、さらには後退してしまいます。ですからパウロは「現にそう歩んでいるのですから、ますますそうしてください」と勧めているのです。私たちも聖書から神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを学び、知り、歩み続けていきましょう。

２．聖なる者となる ３a，７

さて、神に喜ばれることは、神のみこころを行うことです。そして聖書にはっきりと書いている神のみこころが、私たちが聖なる者となることです。【3a神のみこころは、あなたがたが聖なる者となることです。】また神が私たちを召された目的、救われた目的が私たちを聖さにあずからせるためでした。【7神が私たちを召されたのは、汚れたことを行わせるためではなく、聖さにあずからせるためです。】Ⅰペテロ1:15-16にはこうあります。【15むしろ、あなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なるものとなりなさい。16『あなたがたは聖なる者でなければならない。わたしが聖だからである』と書いてあるからです。】後半のみことばはレビ11:44,45の引用です。私たちが聖なる者となることは、旧新約聖書が一貫して教える神のみこころです。

では私たちが聖なる者となるとはどのようなことでしょうか。聖書の「聖さ」「聖」という言葉は分離を意味します。分けて離れるという意味です。それは汚れたもの、罪から分けられ、離れるということです。さらに神の御用のために分けられ、神に属する者となることです。そして実際に清い性質を持つことです。聖なる神は、罪のこの世から全く分離し、罪も汚れもなく、清いお方です。一方、私たちは生まれながらに罪を持ち、罪人として罪と汚れの中を歩んでいました。そのような私たちが、私たちの罪のために身代わりに神のさばきを受けられたイエスを自分の救い主と信じた時に、すべての罪が赦され、神の前に義と認められました。その結果、私たちは立場においては聖なる者となり、聖徒と呼ばれるようになりました。しかしここでの｢聖なる者となる｣とは、先週も学んだように義認の次のクリスチャンの成長段階である聖化のことです。すなわち、神に属する者となった私たちが、神の恵みによって実際に罪から離れ、清い性質を持つ神に似た者、キリストに似た者となることです。そのことを神は願い､私たちが聖なる者となることを神は喜ばれるのです。そして､その聖なる者となる具体的な教えとして｢淫らな行いを避ける｣ことをパウロは教えています。第3の点でそのことを見ていきましょう。

３．淫らな行いを避ける ３b－６、８

【あなたがたが淫らな行いを避け、】淫らな行いとは、あらゆる種類の性的不品行、性的不道徳のことです。なぜパウロがこのことを第1に挙げたかというと、当時のギリシャ･ローマにおいては性的不品行が社会の中に満ちていたからです。パウロがこの手紙を書いているコリントでも性的不品行が満ちていました。そしてテサロニケにおいても同じ状況だったのです。パウロはキリストによって救われた者が、古い生き方のままであってはいけないこと、聖なる者となるためには、淫らな行いを避け、そこから分離しなければならないことを第一の勧めとしてここであげているのです。

【一人ひとりがわきまえて、自分のからだを聖なる尊いものとして保ち、5神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、】神を知らない異邦人は情欲におぼれて、淫らな行いをしていました。しかし、クリスチャンはそうであってはいけません。むしろ自分のからだを聖なる尊いものとして保たなければなりません。Ⅰコリント6:18には【淫らなことを行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです】とあり、自分に対する罪の影響が大きいのです。だからその罪を避け、自分のからだを神に用いられる聖なる尊いものとして保つことが大切なのです。

【また、そのようなことで、兄弟を踏みつけたり欺いたりしないことです。】性的不品行は、自分と相手だけでなく、自分の家族や相手の家族にも悪影響を及ぼします。自分一人の罪にとどまらず、家族に対する罪ともなるのです。さらには教会においても社会においても悪影響を及ぼします。

またそれだけではありません。性的不品行は、神に対する罪なのです。【6b私たちが前もってあなたがたに話し、厳しく警告しておいたように、主はこれらすべてのことについて罰を与える方だからです。】【8ですから、この警告を拒む者は、人を拒むのではなく、あなたがたにご自分の聖霊を与えてくださる神を拒むのです。】神は私たちの幸せのために性の機能を与えてくださいました。しかし、それは神が意図された夫婦の間でのみ用いるべきものです。それ以外の人との性の交わりは淫らな行いであり、神が嫌われる罪なのです。そして神はご自分に従わない者をさばかれるのです。聖書時代のギリシャ・ローマでの性的不道徳は、現代の日本にも通じることです。ですから、私たちはこの神の警告をしっかりと受け止め、淫らな行いから離れ、自分を聖く保たなければなりません。

では私たちがこのことで罪を犯したなら、どうすればよいでしょうか。イエスは「情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです」と言われました。マタイ5:28 そうであれば、たとえ行いの罪を犯していなくても、私たちは心の中で罪を犯しているのではないでしょうか。罪を犯した時に私たちが成すべきことは、悔い改めです。自分の罪を認め、神の前に告白し、主の十字架を仰いで、罪の赦しをいただくことです。そして、その罪から離れることです。主は私たちの罪を赦してくださいます。悔い改めは神が喜ばれることなのです。

さらに聖なる者となるために信仰の前進をしていくことです。聖化のプロセスを一歩ずつ上って行くのです。そのために私たちを助けてくださるのが私たちの内に住まれる聖霊です。「あなたがたにご自分の聖霊を与えてくださる神」とあるように、神は私たちの信仰の成長のために助け主聖霊を与えてくださいました。私たちは自分の力だけで聖なる者に成長することはできません。自分の努力や難行苦行で聖なる者になることはできないのです。しかし私たちが聖なる者になりたいと願う時に、私たちの内に住まれる聖霊が私たちを助けてくださるのです。ガラテヤ5:16には「御霊によって歩みなさい。そうすれば肉の欲望を満たすことは決してありません」とあります。御霊によって歩むとは、御霊に満たされ、御霊に支配されて歩むことです。御霊はキリストの御霊ですから、キリストに従って歩んでいくことです。そうすれば、聖霊が私たちを助け、私たちが聖なる者になるように助けてくださるのです。聖なる者となることは神に喜ばれる歩みです。私たちの人生は悔い改めの連続ですが、恵み深い主の尽きることのない赦しをいただきながら、聖霊の助けをいただいて、一歩ずつ聖なる者となるために、信仰の高嶺を目指して歩んでいきましょう。

Ⅰテサロニケ４章９－１２節「神に喜ばれる日常生活」

１．互いに愛し合う生活 ９－１０

先週は、神に喜ばれる歩みについて学び、特に神のみこころである聖なる者となることを見ました。今日の箇所は、神に喜ばれる日常生活について見ていきます。クリスチャンはどのような日常生活を歩むべきでしょうか。第１の点は互いに愛し合う生活をすることです。【9a兄弟愛については、あなたがたに書き送る必要がありません。】兄弟愛はギリシャ語でフィラデルフィアと言います。アメリカにはこの名前の都市がありますね。クリスチャンは同じ父なる神を信じて神の子どもとされた結果、主にある兄弟姉妹となりました。兄弟愛は、主にある兄弟姉妹が互いに愛し合うことを意味しています。教会内の互いの愛のことです。パウロはテサロニケ教会の兄弟愛については、「あなたがたに書き送る必要はありません」と言って、すでに十分実践していると言っています。

【あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちで、】ここで「神から教えられた人たち」とありますがどういう意味でしょうか。2:13にはこうあります。【あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けた時、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受けてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。】テサロニケ教会は、パウロから互いに愛し合う兄弟愛を教えられました。その時彼らは、この兄弟愛の教えを神のことばとして受け入れ、神から教えられたのです。その結果、神のことばは信じているテサロニケ教会のうちに働き、兄弟愛を実践する者となったのです。

【aマケドニア全土のすべての兄弟たちに対して、それを実行しているからです。】彼らは神から教えられた兄弟愛を実行しました。それはまずテサロニケ教会内で行われました。迫害下にある教会は、互いに愛し合い、助け合うことによって、互いの信仰生活を支え合い、教会を守りました。しかし、彼らの兄弟愛は一地域教会にとどまりませんでした。彼らは同じ迫害下の困難な中にあるマケドニア全土のすべての兄弟たちに対して、兄弟愛を実行したのです。聖書ではピリピやベレヤがマケドニアの教会です。さらにそれ以外のマケドニアの町にも教会があったことでしょう。マケドニア州の中心都市のテサロニケに建てられた教会は、兄弟愛においても中心的な役割を果たしたのです。

そしてこのテサロニケ教会の兄弟愛は、マケドニア諸教会に良い影響を与え、やがてマケドニア諸教会はエルサレム教会を支援したことが、Ⅱコリント8章に記されています。8:1,2【さて、兄弟たち。私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。彼らの満ちあふれる喜びと極度の貧しさは、苦しみによる激しい試練の中にあってもあふれ出て、惜しみなく施す富となりました。】マケドニア諸教会は、余裕があったからエルサレム教会を支援したのではありません。彼らは極度の貧しさの中にあったのです。しかし、信仰による満ちあふれる喜びと愛は、同じように極度の貧しさの中にあるエルサレム教会を助けたいと願い、惜しみなく施す富となって、エルサレム教会に献金を送ったのでした。その献金を受け取ったエルサレム教会は異邦人教会からの愛を受けてどんなに喜んだでしょうか。

【兄弟たち、あなたがたに勧めます。ますます豊かにそれを行いなさい。】4:1では神に喜ばれる歩みを、ますます継続するようにとの勧めがありました。兄弟愛においても同じです。現状に満足し、それで終わってはいけないのです。ますます豊かに兄弟愛を行うことが大切なのです。

神は私たちにも同じように教えておられます。Ⅰヨハネ4:10—11にはこうあります。【私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。愛する兄弟たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた、互いに愛し合うべきです。】兄弟愛は、神の私たちへの愛が原点です。私たちの罪のために神の御子イエスを宥めのささげ物として十字架でささげて下さった神の愛を知った時、私たちも神を愛する者となりました。そして神を愛する者は、同じ神の子どもとされた兄弟姉妹を愛する者となったのです。兄弟愛を実行するためには神がどれほど自分を愛してくださったかを覚えることから始めます。そして自分が受けた神の愛をもって、兄弟姉妹を愛するのです。さらに、その愛を周りの教会に広げていくのです。私たちもますます豊かに兄弟愛を行う者となりましょう。

２．落ち着いた生活 １１

【また､私たちが命じたように､落ち着いた生活をし､自分の仕事に励み､自分の手で働くことを名誉としなさい。】ここでの落ち着いた生活とは、普段通りの生活のことです。そして普段通りの生活とは自分の仕事に励み、自分の手で働く生活のことです。パウロがテサロニケ教会に落ち着いた生活をするように命じた背景には、間違った終末論の理解をする人たちが出て来たためです。来週学ぶ箇所は、キリストの再臨についての教えです。初代教会の特徴は、キリストは間もなく再臨されると信じていたことにあります。キリストの再臨を身近に覚え、再び来られる主を待ち望む生活自体は大切なことです。しかし、ある人たちはキリストが間もなく来られるのなら、地上の仕事は何の意味もないと考えて、働かなくなったのです。その結果、彼らは落ち着いた生活をせず、浮足立った生活をしました。しかし、そのような生活は、クリスチャンとしての正しい生活ではありません。人はクリスチャンになるとこの世離れした生活をするのではありません。主イエスが再び来られるのを待ち望みつつ、普段通りの生活をするのです。このことは第二の手紙でさらに強い口調でパウロが教えています。彼らは仕事をせず、怠惰な生活を行い、人からもらったパンを食べ、おせっかいばかり焼いていたようです。しかし、そのような生活はキリストの再臨を待ち望む正しい生活ではありません。

宗教改革者ルターはこう言いました。「たとえ明日、地球が滅びようとも、私は今日、リンゴの木を植えるだろう。」それは「明日キリストの再臨があるとしても、今日普段通りの生活をする」ということです。主婦(夫)であれば家事や育児という大切な仕事があります。主婦(夫)業は妻に限らず、夫がする場合もあります。学生であれば学ぶという仕事があります。社会で働く人は収入を得るための労働という仕事があります。クリスチャンになったらそれらをやめて、教会生活だけをするのではありません。この世における仕事も神の栄光を現すための広い意味での奉仕なのです。神はこの世の普段通りの生活の中で、神の栄光を現すように私たちを召しておられます。落ち着いた普段通りの生活の中で与えられた仕事を通して、神の栄光を現しましょう。

３．あかしの生活 １２

12節は、普段通りの生活の中で仕事をすることの意味を教えています。それはまずクリスチャンがこの世で良き証しを立てることです。【12a外の人々に対して品位をもって歩み、】外の人々とはまだイエスを信じていない未信者の人のことです。彼らはクリスチャンとはどのような人なのかを、普段の生活の中で見ています。クリスチャンが自分の仕事に励むことは、外の人々に対して品位をもって歩むことです。品位をもって歩むとは、周りの人から尊敬されるような歩みをすることです。もしクリスチャンが仕事をさぼったり、ごまかしたり、或いは仕事をやめて怠惰な生活をすれば、尊敬されることはないでしょう。もちろん仕事に励み過ぎ、体調を崩してもよくありません。今日ワークライフバランスの大切さが言われますが、何事もバランスが大切です。すべてを神の栄光のために、またまず神の国と神を義を求めるという人生の軸足を持って、仕事も家庭生活も教会生活もバランスを保つのです。そのような生活は周りの人たちの良き証しとなります。

もう一つの仕事をすることの意味は、【12bだれの世話にもならずに生活するためです。】すなわち、経済的にも自立した生活をすることです。先ほども言ったようにテサロニケ教会の中には、キリストの再臨が間もなく来るから、仕事をする意味がないと言って仕事をしなくなった人がいました。そのような人は、教会ではパンがもらえると言って、兄弟愛に甘えて生活していたのです。しかし、それは正しい生活ではありませんし、そのような怠惰な生活は未信者への証しとはなりません。パウロは働ける人は働き、自分で得た収入でパンを買って食べるようにと教えています。

もちろん、病になったり、障害を持ったり、高齢になり仕事で収入を得るのが難しくなる場合もあります。今日では社会福祉や年金があり、憲法でも「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」が保証されています。一方、初代教会の時代は国家による福祉制度はなかったため、教会が助けを必要とする人を助ける愛の奉仕が行われていました。その一方で、働ける人は働き、与えられた収入をもって自分と家族の生活を支えるとともに、献金をもって教会の働きを支えました。エペソ4:28には「困っている人に分け与えるため、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働きなさい」とあります。経済的に自立した生活は兄弟愛を実践する生活ともなるのです。

このように落ち着いた生活、普段通りの生活は、神の栄光を現す生活であり、証しの生活であり、さらには兄弟愛を実践する生活となります。言葉による証しは、日常生活での証しの上に成り立っています。ですから、普段の生活が証しのためにはとっても大切なのです。私たちは、言葉による証しを備えつつ、普段の生活で良き証しを立てましょう。そして、機会を生かして、言葉でもイエスの福音のすばらしさを宣べ伝える者となりましょう。

Ⅰテサロニケ４章１３－１８節「キリストの再臨」

１．眠った人たち １３

今日の箇所はキリストの再臨の時に起こるすばらしい出来事について記しています。いったい何が起こるのかを共に見ていきましょう。実はテサロニケ教会の兄弟姉妹はこの出来事を十分理解していなかった結果、悲しみ不安になっていたのです。なぜ彼らが悲しみ不安になっていたかというと、教会員の何人かがパウロがテサロニケを去った後に死んだからです。

すでに見てきたように、初代教会はキリストは間もなく再び来られると信じ、キリストを待ち望んでいました。そして、キリストの再臨の時に救いが完成すると信じていました。その信仰はすばらしいことです。しかし、キリストの再臨を十分理解しなかった結果、二つのことが教会に起こりました。

一つは先週見たように、キリストが間もなく来られるなら、この世の仕事をする意味がないと考えた人たちが、仕事をしなくなったのです。それに対してパウロは、キリストの再臨を信じる者は、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励むことが神のみこころであると教えました。もう一つは今日の箇所にあることです。それはキリストの再臨前に死んだ教会員は、再臨の時に与えられる救いの完成を受けることができないのではないかと誤解して悲しんだのです。さらにもし自分たちもキリストの再臨前に死ぬなら、自分たちの救いも完成しないのではないかと不安に思ったことです。それに対してパウロは今日の箇所で、キリストの再臨前に死んだ人も再臨の時に生きている人も、同じように救いは完成し、いつまでも主とともにいることができるという希望を伝えたのです。

【眠っている人たちについては、兄弟たち、あなたがたに知らずにいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。】「眠っている人たち」とは、14節では「イエスにあって眠った人たち」また16節では「キリストにある死者」とあるように、イエスを救い主と信じて先に死んだクリスチャンのことです。聖書がクリスチャンの死を眠ると表現するのは、死は終わりではなく、やがて目覚める時が来るからです。その目覚める時が復活の時です。しかし眠るのは肉体だけで、たましいは眠るのではありません。クリスチャンのたましいは死んだ瞬間に肉体から離れ、天国に行き、意識を持って主とともに平安のうちにあるのです。パウロはピリピ1:23で「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです」と言い、世を去ることはキリストとともにいることだと言っています。それは、肉体は死ぬと土に帰り復活の時まで眠るが、たましいは天におられるキリストとともにいることを教えているのです。

また「あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです」とあります。「望みのない他の人々」とは、まだイエスを信じていない人々のことです。彼らは確かな死に対する解決と希望を持っていないので、親しい者の死をひたすら悲しみます。一方、クリスチャンはどうでしょうか。クリスチャンも主にある兄弟姉妹の死を悲しみます。特に家族や親しい人の場合はなおさらです。しかし悲しみの中にも、故人のたましいはイエスのもとにあり、さらには天における再会の希望があるので、クリスチャンは未信者の人々のように悲しむ必要はないのです。クリスチャンの死には悲しみにまさる希望があることを、パウロは続く箇所で教えています。そのことを第２の点で見ていきましょう。

２．キリストの再臨 １５－１７

【イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスにあって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずです。】クリスチャンの朽ちたからだが、朽ちない栄光のからだに復活する根拠はどこにあるのでしょうか。それはイエスの復活です。イエスは私たちの罪のために十字架で死に、墓に葬られ、3日目によみがえられました。クリスチャンはイエスが死んで復活されたと信じています。死からよみがえられたイエスを救い主と信じた時、私たちはイエスの死と復活につながる者となりました。その結果、イエスが死んで復活されたように、私たちも死後復活するのです。かしらなるキリストが死からよみがえられたように、キリストのからだなる教会につながる一人ひとりも死からよみがえるのです。

また14節では「神は、イエスにあって眠った人たちを『復活させる』」と言わずに、『イエスとともに連れて来られるはずです』と言うのには意味があります。それは、神は復活した人たちを、イエスとともに天におられる神のもとに連れて来られるということです。復活した人はイエスとともに天の神のみもとに行くのです。

15-17節はイエスの再臨の時に起こる出来事を順番に教えています。【15私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。】主の来臨とは主イエスの再臨のことです。イエスの再臨の時には、イエスにあって眠った人たちがまず復活し、その後で生きている人にすばらしいことが起こるのです。16-17節に詳しく順番どおりの出来事が記されています。

まずキリストが再臨されます。【すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。】キリストの再臨の時に号令がかかります。キリストの再臨に備えよとの号令でしょう。次に御使いのかしらの声が響きます。キリストが来られるとの宣言でしょう。次に神のラッパが響きます。そしてイエスが天からこの世に来られるのです。ヘンデルのメサイア第3部に「ラッパ鳴りて死者は目覚め」というベースの独唱が、トランペットの響きとともに歌われます。その賛美を聞くと、主の再臨を覚えます。実際に神のラッパが鳴り響き、主イエスが天から来られる時は、主を待ち望む者にとってどんなに素晴らしい時でしょうか。

その時、まずキリストにある死者がよみがえります。【16bそしてまず、キリストにある死者がよみがえり、】もやは土に帰り、朽ちてしまった私たちのからだが、この世のからだとは全く違う朽ちない栄光のからだによみがえるのです。先日の召天者記念礼拝でも、教会墓地はクリスチャンにとっては復活の場所であることを覚えました。

次に、その時生きているクリスチャンが、栄光のからだに変えられて天に引き上げられます。そのことを携挙と言います。携帯の携に、選挙の挙と書きます。栄光のからだを携え、天に挙げられるということです。再臨の時に生きている人は、死ぬことなく栄光のからだに変えられて天に引き上げられるのです。【17aそれから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。】生きている人が栄光のからだに変えられる時、死から復活した人たちと一緒に天に引き上げられます。そして空中で主イエスとお会いします。ですから携挙のことを空中携挙とも言います。このように、再臨前に死んだ人も再臨の時に生きている人も共に栄光のからだに変えられて、主にお会いします。またこの時の栄光のからだには、その人のたましいがともにあります。天にあるたましいは復活した栄光のからだと再び一つになるのです。

そして次にイエスとともに天におられる神の御前に行き、新しい天の御国で永遠に主とともに生きる者となります。【こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。】これがキリストの再臨の時に起こることです。なんとすばらしい出来事でしょうか。私たちの救いは、天の御国で完成するのです。

３．互いに励まし合う １８

【ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。】パウロは主の再臨の時に起こるこれらのすばらしい出来事をよく理解して、互いに励まし合うようにと教えました。テサロニケの兄弟姉妹にとって、これらの主のことばはどんなに大きな励ましとなったことでしょうか。キリストの再臨前に死んでも、やがて主の再臨の時には復活し、生きている者とともに天に引き上げられ、救いは完成し、永遠の御国でいつまでも主と共にいることができるのです。そしてこの主のことばは私たちにとっても大きな励ましです。

私たちは死の問題を自分の力で解決することはできません。この世に生を受けた者はみなやがて死を迎えます。死後どうなるのか、だれも自分の力では確かな答えを持つことができません。しかし、私たちには死からよみがえられたイエスがいます。イエスは私たちの罪のために十字架で死んで葬られ、3日目によみがえりました。そして復活によって死に打ち勝ち、イエスを信じる者にも同じ死に対する勝利を与えてくださいました。私たちにとっての死に対する勝利は、まず死の瞬間に私たちのたましいがイエスのおられる天国に行くことです。次に、イエスの再臨の時に私達の朽ちたからだが栄光のからだに復活し、たましいと再び一つとなり、天の御国に行き、いつまでも主とともにいることです。

この死に対する確かな解決を持つ時、死は悲しみではなく喜びに、不安ではなく平安に、絶望ではなく希望になるのです。その結果、地上で様々な試練の中にあっても励まされ、天に入るその時まで、地上で神に与えられた使命を果たしていく力が与えられるのです。その使命とは兄弟愛を示すことであり、普段通りの生活の中で神の栄光を現し、良き証しを立てていくことです。私たちもやがて号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きを聞く時が来ます。そして主が再臨されます。皆さんはその時の備えができているでしょうか。その時に再臨の主イエスを喜び迎える備えは、今日イエスを自分の救い主として心の中に喜び迎えることです。その備えができていれば、主の再臨を喜び迎え、私たちは天に引き上げられるのです。私たちもこれらのことばをもって互いに励まし合いながら、地上での生涯を感謝と希望をもって歩んでいきましょう。そして「しかり、わたしはすぐに来る」と言われるイエスに向かって、「アーメン。主イエスよ、来てください」と応答しながら歩んでいきましょう。

Ⅰテサロニケ５章１－５節「光の子ども」

１．主の日の時 １－３

5章は4章後半の主イエスの再臨の教えの続きです。テサロニケ教会ではパウロが去った後、何人かの兄弟姉妹が亡くなりました。そのような中で人々は一つの疑問を持ちました。それは、イエスの再臨の時に救いが完成するならば、その前に死んだ人たちの救いは完成しないのだろうかという疑問です。それに対してパウロは4:13以降で答えました。イエスの再臨の時に、まずキリストにある死者がよみがえり、その後生き残っている人たちが天に引き上げられ、共に救いが完成し、いつまでも主とともにいることになる。だから、先に眠った人たちのことで悲しむ必要はないと教えました。さて、テサロニケ教会ではもう一つの質問をパウロにしたようです。それは主イエスの再臨はいつあるのかということです。それに対して、パウロは答えました。 1-2「1兄弟たち。その時と時期については、あなたがたに書き送る必要はありません。2主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。」

パウロはここで、あなたがたが今知っていること以上に書き送る必要はないと言っています。パウロはテサロニケ滞在中に主の再臨について教えた時、主の再臨の時期についても教えていました。それはイエスの再臨の時はだれも知らないということです。マタイ24:36でイエスは言われました。「ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」イエスはさらに続けて43,44で言われました。「次のことは知っておきなさい。泥棒が夜の何時に来るかを知っていたら、家の主人は目を覚ましているでしょうし、自分の家に穴を開けられることはないでしょう。ですから、あなたがたも用事していなさい。人の子は思いがけない時に来るのです。」パウロは2節でこのイエスの教えを再確認しています。「主の日は、盗人が夜やって来るように来る」とは、イエスは思いがけない時に来るということです。すなわち再臨の日の突然性です。私たちが予期しない時に、突然やって来るということです。

さらに3節でパウロは再臨の日の必然性についても語ります。必然性とはイエスはいつ来られるかは分からないが、必ず来るということです。「3人々が『平和だ、安全だ』と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。」妊婦の産みの苦しみがいつ来るのか、産み月になればある程度予想できますがいつ来るかは分かりません。陣痛は妊婦にとって突然のように来ますが出産の前に必ず来るのです。同様にイエスもいつ来るかは分からないけれども必ず来るのです。

イエスが天に昇られてから、もうすぐ2000年が経とうとしています。まだ来られないから、イエスはこれからも来られないのではありません。必ず来られるのです。なぜ長い間来られないのかの理由はいくつかあります。Ⅰペテロ3:8-9を見ると2つのことが分かります。一つは、神と人間とは時間の感覚が違うのです。私たちにとって千年は長い期間ですが、神にとっては千年は一日のようなのです。もう一つは、神はすべての人が悔い改めに進むことを願い、忍耐して再臨の時を待っておられるということです。

主イエスがいつ来られるのかはだれもわかりませんが、必ず来られ、突然来られます。ですから、私たちは主の再臨をいつも待ち望むことが大切なのです。私たちは先月アドベントとクリスマスを迎えました。アドベントは主の初臨であるイエスの誕生を祝うクリスマスを待ち望むと同時に、主の再臨を待ち望む時です。もちろん、アドベントの時だけ主の再臨を待ち望むのではありません。アドベントは、私たちがいつも主の再臨を待ち望む信仰を持つことを教えているのです。ですから今日も「主イエスよ、来てください」と主の再臨を待ち望みましょう。

２．主の日の出来事 ４

第2の点では、主の日の出来事について見ていきましょう。2節に主の日と出てきますが、主の日は旧約聖書にも記されています。旧約聖書では主の日は神のさばきの日のことです。祈祷会でアモス書を学んでいた時に、主の日が出てきました。アモス5:18にはこうあります。「ああ。主の日を待ち望む者。主の日はあなたがたにとって何になろう。それは闇であって光ではない。」北イスラエルの民は、主の日には自分たちの敵である異邦人が神のさばきに会うが、自分たちは大丈夫だと思っていたのです。それに対してアモスは、主の日はあなたがたにとって闇であって光ではない。すなわち、神は罪深いイスラエルを主の日にさばかれると言ったのです。イスラエルの民はまさに「平和だ、安全だ」と言っていました。しかし、罪を悔い改めないイスラエルにとって、主の日は神のさばきの日となるのです。

一方、新約聖書では、主の日は主イエスの再臨の日であることが明らかにされます。そして、主の再臨の日には、神のさばきと神の救いの両方の出来事が起こるのです。以前、徳島県の大塚美術館に行った時のことです。そこにはシスティーナ礼拝堂の原寸大のレプリカの部屋があります。中に入ると、天上にはミケランジェロの天地創造から始まる聖書の各場面の壁画が描かれ、正面には最後の審判の絵が描かれています。椅子に座り、最後の審判の絵を見ると厳粛な思いになりました。絵の中心にはイエス・キリストがおられます。そして向かって右側の人たちは神のさばきを受けて、地獄に落ちていきます。一方、左側の人たちは天国に上って行きます。ガイドの人が一通り説明した後、こう言われました。「皆さんは、どちらの側にいたいですか。右側の地獄に落ちる側ですか。左側の天国に上って行く側ですか」あたかも伝道説教のようなお話でした。

3節で「人々が『平和だ、安全だ』と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。」とありました。「突然の破滅が彼らを襲います」とは主のさばきを受けることを意味しています。その人たちにとって、主の再臨は神のさばきの日となるのです。一方、4節ではテサロニケ教会のクリススチャンにとっての主の日の出来事が記されています。「4しかし、兄弟たち。あなたがたは暗闇の中にいないので、その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。」「その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません」とは、確かにクリスチャンにとっても、主の日は盗人が来るように突然来るけれども、あなたがたを襲うことはない、すなわち、神のさばきの日として来るのではないということです。ではクリスチャンにとって主の再臨の日はどのような日なのでしょうか。それは救いの日です。贖いの日です。天に引き上げられ、空中で主とお会いし、新天新地で永遠に主とともに過ごす日です。いったいこの二つの違いの理由は何でしょうか。第3の点で見ていきましょう。

３．光の子どもの祝福 ５

主の日が、ある人たちにとってはさばきの日、もう一方の人たちにとっては救いの日となるのは、その人が闇に属しているのか、光に属しているのかによって分かれるのです。「5あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもなのです。私たちは夜の者、闇の者ではありません。」ここでは光と闇、昼と夜が対比されています。アドベント礼拝の時にザカリアの賛歌を見ましたが、最後にはこうありました。ルカ1:78,79「曙の光が、いと高き所から私たちを訪れ、暗黒と死の陰に住んでいた者たちを照らし、私たちの足を平和の道に導く。」最初の人アダムが罪を犯して以来、すべての人は神に背を向け、神を信じず、自分勝手に生きるようになりました。その結果、罪の暗闇と罪の結果としての死の陰に住む者となってしまいました。闇や夜は、人間の罪を表しています。罪の暗闇の中にいる限り、私たちは自分の犯した罪の結果、やがて神のさばきを受けるのです。神の前には私たちは何も隠すことができません。私たちの心の中の罪も行いの罪もすべて神の前にさらけ出され、主の日には神の公正なさばきを受けなければなりません。その結果は突然の破滅である永遠の滅びです。

しかし、神は私たち一人ひとりを愛し、私たちを滅びの中から救うために救い主イエスをお与えくださいました。そしてイエスは私たちのすべての罪を負い、身代わりに神のさばきを受けて十字架で死んでくださったのです。3日目に死からよみがえられたイエスは天に昇り、私たちの救い主として今も生きておられます。そして、自分の罪を悔い改めてイエスを救い主と信じる者のすべての罪を赦し、永遠のいのちを与え、神の子どもとして下さいます。その時、私たちは罪の暗闇から救い出され、夜の者、闇の者から、光の子ども、昼の子どもとされるのです。光とは世の光であるイエスご自身です。そして光の子どもとは、世の光であるイエスによって、すべての罪を赦され、イエスに属する者とされ、イエスと同じ世の光とされた者のことです。イエスはマタイ5:14で言われました。「あなたがたは世の光です。」またエペソ5:8にはこうあります。「あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあって光となりました。光の子どもとして歩みなさい。」主イエスを信じる時、私たちの罪の闇は光なるイエスの贖いによって取り除かれ、光の子どもに変えられるのです。

主の日は、罪の闇の中に歩む者にとっては、神のさばきの日となります。どんなに「平和だ、安全だ」とこの世の生活に満足しても、神の前に出る時は、自分の罪がさらけ出されて、神のさばきを受けなければなりません。突然の破滅が彼らを襲うのです。一方、自分の罪を悔い改め、イエスを救い主と信じて、すべての罪を赦され、光の子どもとされた者にとっては、主の日は救いの日、喜びの日、復活して永遠の御国に引き上げられ、主とともにいつまでもいる日となります。

私たちは主の日をどちらの日として迎えたいでしょうか。もちろん、さばきに日ではなく救いの日です。そして、私たちを愛する神も、私たちを救うためにいのちをお与えくださったイエスも、主の日が私たちにとって救いの日となることを願っておられます。ですから罪に打ち勝つ世の光として来られたイエスを信じ、光の子どもとなりましょう。またすでに光の子どもとされた一人ひとりは、光の子どもとされていることがどんなに大きな神の祝福であるかを覚え感謝しましょう。そして主がいつ来られても良いように、主を待ち望みましょう。「あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもなのです。私たちは夜の者、闇の者ではありません。」このみことばを、私たち一人ひとりに対する約束のみことばとして、心にいただいて、この一年も歩んでいきましょう。

Ⅰテサロニケ５章６－１１節「光の子どもとして生きる」

１．目を覚まし、身を慎む ６－８

先週は、イエスによって救われた私たちはみな、光の子どもであることを見ました。5節を見てみましょう。「5あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもなのです。私たちは夜の者、闇の者ではありません。」今日の箇所は、光の子どもとされた者はどのように生きるべきかを教えています。まず6節です。「6ですから、ほかの者たちのように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいましょう。」「ですから」とあるのは、「あなたがたはみな光の子ども、昼の子どもですから」ということです。「ほかの者たち」とは、5節の「夜の者、闇の者」のことです。その人たちはキリストを信じず、今だ救われておらず、霊的に眠っているのです。霊的に眠っているとは、神を知らず、神との交わりを持たない状態です。しかし、光の子どもであるクリスチャンはそうであってはいけません。

では、光の子どもであるクリスチャンはどのように生きるべきでしょうか。それは「目を覚まし、身を慎んで」生きることです。「目を覚ます」とは霊的に目覚めていることで、神との生き生きとした交わりに生きていることです。また「身を慎む」は原語では「酔っていない」「しらふで」という意味の言葉です。これは酒に酔わないというだけでなく、この世の様々な誘惑に酔って、神から離れることがないように、自分を自制して生きるということです。私たちはこの世の名誉や地位、財産や持ち物、特定の人や流行に酔いしれて、神との交わりが弱まり、光の子どもであるのに信仰的に眠ってしまう危険性があるのです。そのようなことがないように、神との親しい交わりに生きるために、誘惑から自分を守り、自分を正しくコントロールする自制が必要なのです。

「眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うのです。8しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みというかぶとをかぶり、身を慎んでいましょう。」イエスを信じず、霊的な意味での夜に属する人は、霊的に眠り、この世の物に酔いしれて、神のことを知りません。しかし、私たちは昼の者なのでそうであってはなりません。そのために必要なのが、「信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みというかぶとをかぶる」ことです。胸当てやかぶとは兵士が自分の身を守るために身に着ける武具であり、攻撃のための武具ではありません。クリスチャンは霊的戦いの中にあり、様々な罪の誘惑やそれを用いて私たちを誘惑する悪魔の攻撃から身を守る必要があるのです。

信仰とはイエスを主と信じ、イエスに従う信仰です。イエスを信じる者は、いつもイエスに従って歩みます。イエスならどうされるだろうかをみことばと祈りを通して求め、イエスに喜ばれる生き方をします。また愛は私たちに対する神の愛です。神がご自身のひとり子イエスをお与えになったほど、私たちを愛してくださったことを日々覚えて生きるのです。神の愛を覚える時、私たちも神を愛し、神に従って生きる者となることができます。そして救いの望みとは、やがてイエスが再臨され、私たちが天の御国に引き上げられる時に、救いが完成する望みのことです。私たちはイエスを救い主と信じた時にすでに救われています。一方、私たちの救いは未だ完成していません。救いの完成は私たちが復活し天の御国に行く時です。その時、私たちの救いは完成します。聖書の「望み」「希望」はこうなったらいいのになーという私たちの願いではなく、神が将来確かに実現してくださるものです。救いの完成は、イエスの再臨の時に必ず実現する確かな望みです。

この信仰と愛と救いの望みをしっかりと身に着けるなら、さまざまな罪の誘惑や悪魔の攻撃を受けても、自分の身を守り、身を慎み、自分を正しい生き方に向かうために自制して生きることができるのです。信仰と愛と救いの望みを身に着けて、いつも霊的な目を覚まし、身を慎んで歩んでいきましょう。

２．キリストの救い ９－１０

第2の点では、光の子どもは救いのすばらしさに目を留めて生きることを見ていきましょう。「9神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。」イエスが再びこの世に来られる時、最後の審判が行われます。その時、すべての人はさばき主なる神の前に出なければなりません。罪を持ったまま神の前に出れば、神は私たちを怒られます。その結果、神のさばきを受けて私たちは永遠の滅びに至るのです。しかし神は、罪人の私たちを愛し、私たちが滅びることなく永遠のいのちの救いを得るために、救いの道を備えてくださいました。それが、主イエス・キリストによる救いです。この救いは、自分の罪を神の前に悔い改め、イエスを自分の救い主と信じるなら、だれでも受けることができるのです。

先週も学んだように、イエスを信じている光の子どもは、最後の審判において神の怒り、神のさばきを受けることはありません。光の子どもが神の前に立つ時、イエスが私たちの身代わりに十字架で神のさばきを受けてくださったので、私たちはさばかれることがありません。むしろ、キリストが私たちの罪を贖い、すべての罪が赦されたので、神は私たちを罪のない者と認めてくださり、永遠の救いを得るように定めてくださっているのです。

「主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目を覚ましていても眠っていても、主とともに生きるようになるためです。」「主が私たちのために死んでくださった」これこそ聖書の福音です。キリストはなぜ十字架で死ななければなかったのでしょうか。人間的な理由はいくつかあります。一つはイエスは民衆が期待していたような政治的にユダヤをローマから解放する救い主でなかったからです。その結果、イエスに対する期待は急速にしぼみました。もう一つは、律法学者などの宗教指導者たちのイエスに対する陰謀です。彼らは群衆の支持を得るイエスをねたみ、自分たちを非難するイエスを憎んで、殺そうとしました。そして、イエスを捕らえ、群衆を扇動し、ローマ総督ピラトに訴えて、イエスを十字架刑で殺したのです。

しかし、神の側ではもう一つの理由がありました。それが「主が私たちのために死んでくださった」ということです。罪のないイエスがすべての人の罪を負い、身代わりに神のさばきを受けて、罪からの救いを成し遂げるために、イエスは十字架で死なれたのです。「私たちのために」と言う言葉こそ、私たちにとっての福音なのです。「私たちのために」の「私たち」には「私もあなたも、そしてすべての人」が含まれているのです。イエスを私の救い主と信じるとは、「主は私のために死んでくださった」と信じることなのです。その時に私たちはすべての罪が赦され、永遠のいのちをいただいて救われます。

10節後半では、さらに「主が私たちのために死んでくださった」目的が記されています。それは「私たちが、目を覚ましていても眠っていても、主とともに生きるようになるためです。」目を覚ましているとは生きていることで、眠っているとは死んでいることです。クリスチャンのたましいは死後すぐに天国に行き、主とともにいるようになります。また4章後半で学んだように、イエスの再臨の時にはまずイエスにあって眠った人たち、即ちキリストにある死者のからだがよみがえり、次にその時生きている人が引き上げられ、空中で主とお会いし、天の御国に挙げられ、いつまでも主とともに生きるようになります。このように私たちが生きている時も死ぬ時も主とともに生きるために、主は私たちのために死んでくださったのです。イエスの復活により、死はすでに勝利に飲まれました。クリスチャンにとって死は最後の敵ではなくなったのです。このすばらしいイエスの救いに目を留めて生きることが、光の子どもとしての生き方なのです。

３．主にある交わり １１

第３の点では、光の子どもは主にある交わりの中に生きることを見ていきましょう。「11ですからあなたがたは、現に行っているとおり、互いに励まし合い、互いを高め合いなさい。」新約聖書には「互いに」という言葉がたくさん出てきます。以前、「互いに」ということばを調べたことがあります。「互いに愛し合う、仕え合う、赦し合う、訓戒し合う、忍び合う、従い合う、語り合う、教え合う、忠告し合う、慰め合う、祈り合う、もてなし合う」などなど。ここでも「互いに励まし合い、互いを高め合いなさい」とあります。イエスを信じたクリスチャンは、永遠のいのちをいただき、神の怒りを受けることなく天の御国に行けるので、あとは一人で信仰を守りなさいとは聖書は教えていません。そうではなく、イエスを信じたクリスチャンが、主にある交わりの中で、互いに関わり合って生きることを神は願っておられるのです。そのために、神は教会を建てられたのです。

へブル10:25「ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」その日とは、主イエスの再臨の日です。その日が近づいているので、ますます一緒に集まることに励もうと勧められています。私たちが目を覚まし、信仰と愛と救いの望みを身に着けて慎み深く歩むために、また救いのすばらしさに目を留めて生きるためには、互いに励まし合うことが必要なのです。励まし合うには慰め合うという意味もあります。私たちは弱い者ですから、気落ちすることがあります。その時、慰めてくれる人があればどんなに心強いでしょうか。

「高め合う」の高めるには家を建てるという意味があります。信仰生活は家を建てることに例えられます。土台は主イエス・キリストです。その上に信仰によって自分の人生を築いていきます。その時に神のことばが必要です。みことばに養われながら、神に喜ばれ、神の栄光を現す人生という建物を建てていきます。さらに主にある交わりの中で互いの人生の建築を助け合うことができるのです。教会の交わりはそのような交わりです。この世では打たれ、たたかれ、崩れかけるような出来事があっても、教会に来れば互いに建て上げ、高め合うことができる。教会がいつもそのような交わりの場となれば、どんなに幸いでしょうか。そして、それこそ教会の交わりの目的なのです。さらに、互いに高め合うことによって、キリストのからだなる教会も建て上げられていきます。なぜなら私たちはキリストのからだの各部分だからです。各部分が成長することによって、教会全体が成長していきます。

今日も光の子どもとされた幸いを覚えましょう。そして目を覚まし、身を慎み、キリストの救いのすばらしさに目を向け、主にある交わりを大切にしましょう。今週も、光の子どもとして霊的暗闇のこの世で輝くために、主によって遣わされましょう。

Ⅰテサロニケ５章１２－１５節「いつも善を行う」

１．指導者についての教え １２－１３

今日の箇所でパウロは、誕生したばかりのテサロニケ教会が、キリストのからだとして成長していくために必要な3つのことを教えています。そしてそれは、すべての教会が建て上げられていくために必要なことです。第1のことは、教会指導者に対する教会員の態度についての教えです。使徒14:23を見ると、パウロは各地で伝道し教会が誕生すると、教会ごとに長老たちを選び、彼らに教会の指導を任せて、次の町に行ったことが記されています。キリストのからだなる教会が建て上げられていくためには、みことばによって群れを導く指導者が必要であり、キリストご自身が使徒たちを通して、地域教会の指導者を立てられたのです。エペソ4:11-12でパウロは次のように言っています。「こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒、ある人たちを預言者、ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました。それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。」パウロはこのことをテサロニケ教会の兄弟姉妹にも理解してほしいと願い、12—13節で教会指導者に対するふさわしい態度について教えました。

「兄弟たち、あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人たちを重んじ、13その働きのゆえに、愛をもって、この上ない尊敬を払いなさい。また、お互いに平和を保ちなさい。」地域教会の指導者は新約聖書では長老、監督、牧師と呼ばれています。呼び名は違っても同じ職を指しています。12節では教会指導者はどのような人かが3つ語られています。一つは「あなたがたの間で労苦し」ている人です。即ち神の召しに応え、教会のために献身して働いている人です。

2つ目は「主にあってあなたがたを指導し」ている人です。「主にあって」とあります。教会指導者は自分の考えやこの世の方法によって教会を指導するのではありません。「主にあって」とは、主のみことばを教えることによってということです。パウロは使徒20:32でエペソ教会の長老たちに言いました。「今私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なる者とされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができるのです。」エペソ教会の長老たちは、パウロの勧めに応答し、みことばを教えて教会を指導しました。それはテサロニケ教会でもすべての教会でも同じです。神はみことばによって教会の歩むべき道を指し示し、導かれます。ですから教会指導者は、みことばによって教会の歩むべき道を指し示して導くのです。3つ目は「訓戒している人たち」です。「訓戒する」は14節では「諭す」と訳されており、間違った方向に行く人を戒め、正しい方向に歩むように諭すことです。訓戒する働きも、みことばに基づいて行われます。

そして、このような3つのことを行っている教会指導者を「重んじ」るようにと、パウロはテサロニケの兄弟姉妹に教えます。「重んじる」とは「十分に知る」と言う意味の言葉です。教会指導者とはどのような人なのか、その働きは何なのかを十分知る時、教会員は指導者たちを重んじることができるのです。牧師は、教会のかしらなるキリストご自身が、教会を建て上げるために立てられた人であること、その働きはみことばによって教会を指導し、訓戒することであることを十分知るなら、その働きのゆえに牧師職に就いている人を重んじます。そして「愛をもって、この上もない尊敬を払う」ようになります。牧師も欠点があり失敗もします。ですから、足りない所を見ていれば、尊敬できないと思うかもしれません。しかしキリストが立てられた牧師の働きの尊さを覚え、その意味を十分に知れば、その働きのゆえに愛をもって、この上ない心からの尊敬を払うことができるのです。牧師職を重んじることはキリストのからだ成る教会が建て上げられるために必要なのです。牧師職が軽んじられる教会は決して成長しません。なぜならそれは牧師を立てられたキリストを軽んじることになるからです。一方、牧師もキリストによって立てられていることを覚え、かしらなるキリストとキリストのからだなる教会の前で、謙遜に忠実に仕えることが重要です。

このことは「また、お互いに平和を保ちなさい」という教えからもわかります。「お互いに」ですから、これは信徒だけでなく牧師に対しても言われています。牧師もキリストのからだの各部分として召されている兄弟姉妹を愛し、この上ない心からの尊敬を払うことが大切です。なぜなら、一人ひとりはキリストの尊い血潮によって、買い取られている人だからです。牧師も信徒もそのような態度で接すれば、平和が保たれ、キリストのからだなる教会が建て上げられていくのです。

２．教会員相互の教え １４

第2の点では教会員同士についての教えです。40周年の活動計画を担うチームに「牧師と信徒による教会形成」があります。牧師だけが教会形成をするのではありません。信徒も牧師と共に教会形成を行うことを特に意識したいと願っています。14節はまさにそのことを教えています。ここでは牧師だけでなく、教会員が相互に教会の働きを担うことが教えられています。｢14兄弟たち、あなたがたに勧めます。怠惰な者を諭し、小心な者を励まし、弱い者の世話をし、すべての人に対して寛容でありなさい。｣14節では信徒も牧師とともに4つのことを行うことが教えられています。

一つ目は訓戒の働きです。14節の「諭す」は12節の「訓戒する」と同じ言葉ですので、諭すとは訓戒の働きです。ここでは怠惰な者を諭すように教えています。怠惰な者とは、4章で学んだように、キリストが間もなく来られるのなら、地上の仕事は何の意味もないと考えて、働かなくなった人たちのことです。彼らは落ち着いた生活をせず、浮足立った生活をし、結局教会の世話になって生活していました。そのような人たちを訓戒し、諭すのです。怠惰な生活は正しい生活ではないことを伝え、4:11にあるように「落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くことを名誉とするように」諭すのです。このように訓戒の働きを牧師とともに教会員も担うのです。もしだれかが道に迷いそうになっているのに気づいたら、愛をもってみことばを示しつつ訓戒し、諭すことができれば、その人は正しい道に戻ることができます。

二つ目は励ます働きです。小心な者を励ますように教えています。小心な者とは試練に会って落胆し落ち込んでいる人のことです。励ますは慰めるという意味もある言葉です。ですから、ただがむしゃらにかんばれと叱咤激励するのではありません。その人の状況に応じて慰めたり、話を聞いてあげたり、励ましたりして、再び元気を取り戻すために支えることです。

3つ目は世話をする働きです。弱い者の世話をするように教えています。弱い者とは特に信仰の弱い人のことです。まだ十分信仰の成長をしていない人のことです。信仰の成長をしている強い人は、信仰の弱い人が成長するように世話をするのです。これは先に救われた人が、後から救われた人の信仰の成長のために世話をし、教え支えるという大切な働きです。このことが教会で行われるなら教会は信仰的に絶えず成長していきます。

4つ目は寛容であることです。すべての人に対して寛容であるようにと教えています。これは今までの3つの働きをするために必要な土台となる態度です。教会の中で「怠惰な者を諭し、小心な者を励まし、弱い者の世話をする」ためには、その人たちへの寛容な態度が必要です。寛容は御霊の実の一つです。また「愛は寛容であり」とあるように愛の実です。教会員同士が互いに愛し合い、寛容をもって接する時に、教会員同士の相互牧会が行われ、その結果、キリストのからだなる教会が建て上げられるのです。

３．すべての人への教え １５

第3の点では、教会内の働きから教会の外に向かう働きについて見ていきましょう。「15だれも、悪に対して悪を返さないように気をつけ、互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行うように努めなさい。」15節では「互いの間で」という教会内の働きから「またすべての人に対して」という教会外の人たちへの働きへの広がりを教えています。何をするように教えられているでしょうか。

まず「だれも、悪に対して悪を返さないように気をつける」ことです。テサロニケ教会は町の人たちから迫害を受けていました。パウロはすでにテサロニケから出てこの時コリントにいましたが、テサロニケ教会の兄弟姉妹はこの時もテサロニケにとどまり、迫害の中で信仰生活を守っていました。もちろんパウロも伝道する先々で迫害に会いました。罪人の人間の心には、悪に対して悪を返そうとする復讐心があります。このやられたらやりかえすという復讐心の結果、人間の歴史は絶えず争いがあり、戦争にまで発展することもあります。しかし、教会そしてクリスチャンは「悪に対して悪を返さないように気をつける」のです。それは教会内の人々においても、また教会外の人々に対してもです。

そしてこの教えのより積極的な教えが「いつも善を行うように努めなさい」です。「いつも」とは継続性です。時々ではなく、いつでもです。またすべての人に対してです。自分に善を行う人に対して、お返しとして善を行うことはそれほど難しくないでしょう。しかし悪を行う人に対しても善を行うことは難しいことです。だからこそ自分の思いに任せるのではなく、みことばに従い、努めて、即ち努力して行う必要があるのです。この教えはローマ12:21の「悪に負けてはいけません。むしろ、善をもって悪に打ち勝ちなさい」の教えと一致します。また「またいつも善を行うように努めなさい」の教えは、今日学んだ牧師の働きにおいても、牧師と信徒の関係においても、信徒同士の相互の働きにおいても当てはまる原則的な教えです。何が善なのかをみことばによって知り、みことばに従って行く時、教会が建て上げられていきます。

また教会の働きは教会内にとどまらず、教会の外に向かっても広がっていきます。それは証しとなり、伝道となります。教会が互いに愛し合い、尊敬し合い、善が行われ、平和が保たれていれば、教会に来た人にキリストの救いが証しされ、みことばが伝わります。この年も｢互いの間で､またすべての人に対して､いつも善を行うように努め」ながら、共にキリストのからだなる教会を建て上げていきましょう。

Ⅰテサロニケ５章１６－１８節「喜び祈り感謝」

１．いつも喜び １６

今日の箇所はⅠテサロニケの中で最も有名なみことばであり、聖書全体の中でも有名なみことばです。このみことばを自分の愛唱聖句にしておられる人も多くおられます。このみことばは私たちが日々の生活の中で、どのように生きるべきかについて、単純明快に教えています。3つの教えはそれぞれ別々のものではなく３つが互いに関係し合っており１つの教えの３つの側面と言うことができます。一つ一つ順番に見ていきましょう。

「いつも喜んでいなさい。」私たちの人生には様々な出来事が起こります。良いことがあれば私たちは素直に喜ぶことができます。しかし、悲しいこと、つらいこと、苦しいことを経験する時に、人は喜ぶことができるのでしょうか。またクリスチャンになれば、悲しんだり、悩んだり、苦しんだりしなくなると聖書は教えているのでしょうか。そうではありません。ローマ12:15には「喜んでいる者たちとともに喜び、泣いている者たちとともに泣きなさい」とあります。クリスチャンも悲しい時は泣いてもいいし、むしろ、ともに泣きなさいと教えています。ラザロの死を悲しむ人たちを見て、「イエスは涙を流された」とあり、イエスも共に泣かれたのです。ですから、この教えは人間の感情を封じ込めて、泣いてはいけない、悩んではいけない、苦しんではいけないと教えているのではありません。クリスチャンも泣いてもいいし、悩んでもいいし、苦しんでもいいのです。それが地上に生きる人間の生き方です。

私たちが地上の悩み苦しみから完全に解放されるのは、天国に行った時です。黙示21:4には新しい天の御国のことが書いてあります。「神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい去ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」救いが完成する天国では、私たちはいつも喜んでいます。一方、地上では涙もあり、悩みもあり、苦しみもあるのが私たちの人生です。それはクリスチャンになっても同じです。その中で「いつも喜んでいなさい」と教えています。しかも今日の3つの教えはみな命令形です。「喜んだ方がいいですよ。祈ったほうがいいですよ。感謝したほうがいいですよ」ではなく、「喜びなさい。祈りなさい。感謝しなさい」と神が私たちに命じておられるのです。ではどのようにすればこれらのことを実行できるのでしょうか。

喜びについては、クリスチャンにはどんなときにも喜べる理由があるということです。Ⅱコリント6:10には「悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり」とあります。一見矛盾するようですが、クリスチャンは悲しみの中にも喜べる理由を持っているのです。Ⅱコリント12:10にはこうあります。「ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいます。というのは私が弱い時にこそ、私は強いからです。」パウロが困難をも喜べるのは「キリストのゆえに」、すなわちキリストが理由だと言いました。そのキリストが「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから困難の中でキリストによって強くされる恵みを覚えてパウロは喜ぶことができたのです。

またピリピ4:4でパウロは「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい」と教えました。ここでもいつも喜ぶことができる理由は「主にあって」即ち主イエスにあると教えています。「少女パレアナ」の本は、両親が亡くなり孤児になったパレアナが叔母の家に引き取られていく本です。叔母はパレアナにつらく当たりますが、パレアナは牧師だった父親から教えられた喜び捜しをします。それはどんな状況でも喜べることがあることを捜し当てて喜ぶゲームです。パレアナの喜び捜しは、やがて周りの人に伝わっていき、最後には叔母も喜び捜しをするようになるのです。

「少女パレアナ」には「主にあって」と言うことばは出て来ませんが、クリスチャンはどんな時でも、主イエスのうちに喜びを見出すことができます。ですから主にある喜び捜しができるのです。弱い時に主の恵みが十分あり強められることを知る時、私たちはその主の恵みを喜ぶことができます。インマヌエルの主がいつも私たちとともにいてくださることを知って、主の臨在を喜ぶことができます。神を愛する者にはすべてを働かせて益としてくださる主のご計画を覚える時、将来の祝福を先取りして今喜ぶことができます。何よりも、イエスに救われ、罪が赦され、永遠のいのちをいただき、神の子どもとされている特権を覚えて喜ぶことができます。これらの神の恵みはいつも変わることがありません。「いつも喜んでいなさい」の教えは、自分の力でできるものではありません。キリストのゆえに、主にあってのみ可能であり、そして主にあって必ずできることなので、主は私たちに命じておられるのです。ですから主にあっていつも喜ぶ者となりましょう。

２．絶えず祈り １７

第2の教えは「17絶えず祈りなさい」です。クリスチャンにとって祈りは霊的呼吸と言われます。呼吸は絶えずしています。しかし、私たちは呼吸のように絶えず祈ることはできません。寝ている時は祈れませんし、仕事をしている時も勉強をしている時もそのことに集中しているので祈れません。では絶えず祈りなさいとはどういうことでしょうか。一つは祈りの習慣化です。どのように祈りを習慣化させることができるでしょうか。まず毎日聖書を読み祈る個人デボーションの時間を持つことです。一日のうちに時間を決め、ひとり神の前に静まって聖書を読んで祈る時を習慣化させるのです。その時、神の前に感謝と賛美、願いととりなしの祈りの時間を持ちます。またクリスチャンは食事の前に感謝の祈りをします。ある時ホテルで朝食を食べていると近くの席の人が祈り始めました。クリスチャンだなあと思い、後から声を掛けてあいさつしました。これも全世界共通のクリスチャンの良い祈りの習慣です。夜寝る前の祈りや運転前の祈りなど、日常生活の中での祈りの習慣を持ち、神に祈ります。

また絶えず祈ることの二つ目は、時間を決めずにいつでも祈ることです。これは習慣化された特定の時の祈りではなく、いつでもどこでも祈る祈りです。そのような祈りはたいてい短い祈りです。声を出さずに心の中で祈ることもあります。主の導きを必要とする時に、短く祈って行動します。ネヘミヤ書にはそのような祈りがあります。王の献酌官であったネヘミヤは、エルサレムが廃墟になっていることを知り、心沈んでいました。それに気づいた王がネヘミヤに「何を望んでいるのか」と聞きました。そこでネヘミヤは神に祈ってから「私をエルサレムに遣わし都を再建させてください」と伝えました。その時のネヘミヤの祈りは声を出さず、短く主の助けを祈ったのです。その祈りを神は聞かれ、王はネヘミヤにエルサレムに帰る許可を与えました。ネヘミヤはその後も事あるごとに短い祈りをしています。私たちはいつでもどこでも祈っていいし、また祈るべきなのです。祈ることを通して、私たちは神の臨在を覚え、神の導きを実感することができます。

祈りは神との会話です。どんなことでも神に祈っていいのです。そしてこの祈りが、いつも喜び、すべてのことにおいて感謝するための秘訣なのです。私たちはどのようにして、主にある喜び捜しをすることができるでしょうか。それは祈りによってです。試練の中で神に悲しみ、悩み、苦しみを訴えます。そして神の助けを祈ります。さらに祈りの中で試練のただ中にも変わることのない主の恵みを覚えるのです。そうすると、苦難の中にも神が共にいて助けてくださること、変わらない十字架の救いと神の子どもの特権があること、すべてを働かせて益としてくださる神の計画があることを確認することができます。時には祈れないと思う時もあるでしょう。それでも「神様」と呼びかけるのです。そうすれば聖霊なる神が、私たちが祈れるようにとりなしてくださいます。御霊のとりなしがあるので、「絶えず祈りなさい」の教えが私たちに可能となるのです。ですから御霊のとりなしをいただきながら、絶えず祈りましょう。

３．すべてのことにおいて感謝 １８

第3の教えは「18すべてのことにおいて感謝しなさい」です。喜びと同じで感謝も、良いことがあれば自然にできます。しかし苦難の中で感謝できるでしょうか。普通なら「できません」で終わってしまうでしょう。しかし、聖書は「できるし、そうしなさい」と教えています。「すべてのことにおいて」は原語では「すべてのことの中で」となっています。別の箇所では「あらゆる場合に」と訳されています。良いことの中で感謝するのは簡単です。しかし悪い出来事や悪い状況の中でも感謝できることがあるし、それを見つけて感謝しなさいということです。主にある喜び捜しと同様、主にある感謝捜しです。そして、その感謝探しも祈りを通して行うことができるのです。しかも、その感謝探しの祈りは、祈りの中で感謝を見つけながら、実際に感謝の祈りをすることなのです。

ピリピ4:6-7にはこうあります。「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を越えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」ここでの「あらゆる場合に」は「すべてのことにおいて」と同じ原語「すべてのことに中で」です。どんな状況の中でも感謝をもって神に祈るのです。まず「神様、感謝します」と祈ります。次に具体的に感謝と願いを神に伝えるのです。そうすると神の平安が与えられ、さらに神に感謝することができます。私たちの感謝の源は神にあります。この世の出来事に目を向けるなら決して感謝できない時も、神に心を向ければ神の愛と恵み、神の真実と支配を覚えて感謝することができるのです。

さてこれらの３つの教えには、これらを行う理由があることが最後に記されています。「これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」「神があなたがたに望んでおられることです」は、直訳は「あなたがたへの神のみこころです」となります。いつも喜び、絶えず祈り、すべてのことにおいて感謝することは、神の子ども、光の子どもに対する神のみこころなのです。だからこそ私たちは神のみこころを行うのです。神のみこころを行うことは、私たちが救われた目的です。そして神のみこころは私たちにとって悪いものではなくいつも最善です。

またこの神のみこころはキリスト・イエスにある神のみこころです。私たちが神のみこころを行うことは、キリスト・イエスにあって可能となるのです。私たちは自分の力ではいつも喜び、絶えず祈り、すべてのことにおいて感謝することができません。しかしイエスが私たちを助けてくださるので、可能となるのです。ですから、この神のみこころをイエスの助けをいただきながら行っていきましょう。いつも喜び､絶えず祈り､すべてのことにおいて感謝する光の子どもとして、それぞれ置かれた場所でイエスの助けをいただきながら日々歩んでいきましょう。

Ⅰテサロニケ５章１９－２２節「良いものをしっかり保つ」

１．御霊を消さない １９

今日の箇所も引き続き、クリスチャンが光の子どもとしてどのように歩めばよいかを3つ教えています。第1は19節の「御霊を消してはいけません」です。ここでは御霊、聖霊を火に例えています。それはペンテコステの日に聖霊が、炎のような分かれた舌によって現われ、イエスの弟子たちの上にとどまったからです。パウロはテサロニケの兄弟姉妹に対して、聖霊の火を消してはいけないと教えました。

では、御霊を消すとはどういうことでしょうか。それはクリスチャンから聖霊が去られ、聖霊を失うことではありません。聖霊は、父、子、聖霊の三位一体の神のお一人で、真理の御霊、助け主とも呼ばれます。その聖霊は、私たちがイエスを救い主と信じて救われた時に、私たちの心に来て下さり、心の内に住んで下さいます。ですから内住の聖霊とも言われます。Ⅰコリント6:19にはこうあります。「あなたがたのからだは、あなたがたの内におられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。」私たちの内に住まれる聖霊は、私たちから決して離れ去ることはありません。イエスはヨハネ14:16で言われました。「そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をあなたがたにお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます。」聖霊は私たちが天の御国を受け継ぐ保証であり、いつまでも私たちの内に住んでいてくださいます。ですから、聖霊を消すとは、聖霊を失うことではありません。

では御霊を消すとはどういうことでしょうか。それは、私たちの心の内におられる聖霊が、十分働かれなくなることです。聖霊がおられても、聖霊が働かれないのです。聖霊が私たちの内で働かれなくなるとどうなるでしょうか。それは、私たちは聖霊が結ばせてくださる良きものを信仰生活の中で結べなくなるのです。聖霊がくださる聖さや義の実を結べなくなり、聖化という信仰の成長が止まってしまいます。聖霊が与えてくださる平安や喜びや希望が信仰生活からなくなってしまいます。(ローマ14:17、15:13)聖霊の助けを十分に受けれず、祈る力が弱くなり、みことばの真理を悟れなくなります。(ローマ8:26、ヨハネ14:26)また証しの力を発揮できなくなります。(使徒1:8)愛、喜び、平安などの御霊の実を結べなくなり、御霊の賜物を生かして用いることができなくなります。(ガラテヤ5:22-23､１コリント12章)

では私たちがどのような状態になると、聖霊が働かれなくなるのでしょうか。それはまず私たちが罪を犯す時です。エペソ4:30には「御霊を悲しませてはいけません」とあります。聖い神の霊である聖霊は、私たちが罪を犯す時、悲しまれ、十分働くことができなくなります。また私たちが自己中心の思いに従う時も、聖霊が働かれません。聖書はこの自己中心の罪の性質を肉と呼んでいます。Ⅰコリント3章では、クリスチャンには御霊に属する人と肉に属する人がいると教えています。肉に属する人は、御霊の思いよりも肉の思いが優先するのです。その結果、聖霊はその人に十分働かれません。

御霊を消さないために必要なのは、私たちが御霊の思いに従って生きることです。御霊の思いは神のみこころに従って生きることです。自己中心の肉の思いに支配されて生きるのではなく、神を第一とし、神のみこころに従って生きる時、聖霊は私たちの内に働いてくださいます。また罪を犯した時には、すぐに悔い改めて主の赦しをいただくことです。神は何度でも私たちの罪をきよめてくださり、神との親しい交わりを回復させてくださいます。そうすれば、私たちは御霊を消すことなく、むしろ御霊に燃やされ、御霊に満たされ、御霊によって歩むことができます。その結果、聖霊によって聖化の道を歩み、私たちは成長します。御霊の実を結び、証しの力が与えられ、祈りとみことばに養われます。また御霊の賜物を用いて奉仕に励むことができます。ですから御霊を消すことなく、むしろ御霊に燃やされて歩みましょう。

２．預言を軽んじない ２０

私たちが光の子どもとして歩むために必要な第2のことは、20節の「預言を軽んじてはいけません」です。新約聖書が完成するまで、初代教会は旧約聖書しか持っていませんでした。そこで使徒や預言者と言われる人が、キリストの教えを宣べ伝えました。エペソ4:11には「こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒、ある人たちを預言者、ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました」とあります。今日も伝道者、牧師、教師は教会の職としてあります。一方、使徒と預言者の職は新約聖書が完成するまで存在し、新約聖書完成後はなくなりました。使徒はイエスの12弟子とパウロです。使徒は直接イエスによって任命され、初代教会を指導し、新約聖書は使徒たちのもとで記されました。また預言者は使徒のもとで働き、神の教えを伝えた人です。預言は神のことばを預かる者という意味で、新約の預言者はキリストの教えを伝えました。御霊の賜物の中にも預言の賜物があります。彼らの働きは新約聖書が完成し、そこにキリストの教えのすべてが記されたので、終了したのです。

今日気をつけなければならないのは、今も預言者や使徒がいるという間違った教えです。以前、ある青年宣教大会の講演テープを聞いていると、講師の一人が「今日私は神からの預言の啓示を受けました」と言って、日本は神の祝福を受けるというようなことを話していました。しかし、新約聖書完成後は、新たな神の啓示を神が人間に伝えることはありません。ある教会は預言カフェというカフェを開き、希望者に神からの預言を伝えるそうですが、このような預言は聖書の教えではありません。また新使徒運動という運動があります。これは今日神は新たに使徒を任命し、その使徒たちによって新たな神の啓示を伝えておられるというものです。そしてこの運動は宗教改革に匹敵する新たな教会改革となると教えています。しかしこれも間違った教えですので、注意しなければなりません。

さて、では20節の「預言を軽んじてはいけません」とはどういう意味でしょうか。新約聖書が完成するまでの時代では、キリストが立てられた預言者たちが語るキリストの教えを軽んじてはいけないということです。そして、新約聖書の完成後に生きるクリスチャンにとっては、神のことばである聖書の教えを軽んじてはならないということです。むしろ神のことばを重んじ、神のことばに養われ、神のことばに従って生きることが、信仰の成長のために必要なのです。Ⅰペテロ2:2にはこうあります。「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」純粋な霊の乳とは、みことばのことです。私たちはみことばによって成長し、やがて救いの完成に至るのです。聖霊は真理の御霊として、みことばを解き明かし、私たちに教えてくださいます。みことばを重んじる信仰生活は、御霊によって歩む信仰生活なのです。ですからみことばを重んじ、みことばを慕い求めて歩みましょう。

３．良いものを保ち悪から離れる ２１－２２

光の子どもに必要な第3のことは、良いものを保ち悪から離れることです。この二つはコインの両面のようなものです。一つずつ見てみましょう。まず21節「ただし、すべてを吟味し、良いものはしっかり保ちなさい。」吟味するとは、良いものか悪いものかをテストして見分けることです。新約聖書が完成するまで預言者が神のことばを伝えましたが、偽預言者もたくさん出てきました。ですから、彼らが本物か偽物かを吟味しなければなりませんでした。本物か偽物かの判断基準は、イエスに対するどのような信仰を告白しているかです。Ⅰヨハネ4:2には「人となって来られたイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです」とあります。イエスが神が人となって来られた救い主であると信じているかが重要な判断基準でした。今日の私たちへの教えとしては、伝道者や牧師や教師が、聖書に啓示されている神のことばを正しく伝えているかが、判断基準となります。Ⅱテモテ2:15でパウロはテモテに「真理のみことばをまっすぐに解き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるように最善を尽くしなさい」と教えました。真理のみことばをまっすぐに解き明かすとは、みことばを正しく解き明かすことです。私たちはまっすぐに解き明かされた真理のみことばの教えを、しっかりと心に保つことが大切なのです。

また21節は、さらに広く私たちの生活のすべての事柄において、それが良いものか悪いものかをテストし、良いものをしっかりと生活の中に保つようにと教えています。この場合の判断基準は神のことばです。ピリピ4:8にはこうあります。「すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判の良いことに、また何か徳とされることや称賛に値することがあれば、そのようなことに心を留めなさい。」私たちは日々の生活の中で様々なことに関わります。その中には良いことも悪いこともあります。ですから、吟味せずに何でも受け入れることは危険です。みんながしていることだから自分もするのではなく、クリスチャンはみことばによって一つ一つを吟味し、すべての良いものを受け入れ、しっかりと保って生活することが大切です。そのことによって、私たちはこの世のすべての良いものをもって、神の栄光を現すことができるのです。

もう一つのコインの面は22節の「あらゆる形の悪から離れなさい」です。これは良いものをしっかり保つの正反対のことです。良いものをしっかり保つためには、悪いものから離れなければなりません。離れるは4:3では避けると訳され、「あなたがたが淫らな行いを避け」と教えています。私たちは悪に近づけば、誘惑に負けてしまいます。ですから私たちは悪を避け、悪から離れることが大切なのです。悪か善かの判断基準も神のことばです。ですから神のことばである聖書を日頃からよく学んでおく必要があります。また悪にはあらゆる形があります。神との関係を妨げる悪、道徳倫理的な悪、社会的な悪、法律に違反する悪、人との関係における悪、人の人権を侵害する悪もあります。また今日多くの情報が流れる時代にあってフェイクニュースという悪もあります。それを信じることによって、その人の生き方が悪い方向に影響されます。あらゆる形の悪から離れつつ、すべての良いものをしっかりと保つことが、光の子どもとして輝いて生活するために必要です。御霊を消さず、預言を軽んじず、良いものを保ち、悪から離れて、光の子どもとして輝いて歩んでいきましょう。

Ⅰテサロニケ５章２３－２８節 「主イエスの恵み」

１．聖なる者とされる ２３－２４

今日で1テサロニケの講解説教は最後となります。来週からはⅡテサロニケの講解説教となります。パウロはこの手紙を閉じるにあたり、祈りと勧めと祝祷の3つを記しています。最初はパウロの祈りの部分です。まず23節前半です。「23a平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。」平和の神とは、キリストの贖いによって私たちの罪を赦し、神との平和を与えてくださった神のことです。その神があなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますようにとパウロは祈りました。

4:3でパウロは「神のみこころはあなたがたが聖なる者となることです」と教えました。すでに確認したことですが、私たちが聖なる者となるのには3つの段階があります。一つは義認です。神の前に義と認められることです。義認は私たちが自分の罪を悔い改め、イエスを救い主と信じた時に与えられます。その時私たちはすべての罪が赦され、神の前に正しい者、聖なる者、聖徒として受け入れられます。そして、神との平和が与えられ、神とともに生きる新しい人生が始まります。2つ目は聖化です。聖い者に変えられることです。私たちは義認によって神の前に聖なる者としての立場を与えられました。それはイエスを信じた瞬間に起こる神の救いです。それに対して聖化は、救われた後、実際に聖い者に変えられていくプロセスです。それはクリスチャンがキリストに似た者に成長していくことです。そして、3つ目は栄化です。それは救いの完成であり、完全に聖なる者となることです。栄化は、主イエスが再臨され、私たちが天国に行った時に起こります。聖化の段階で私たちは徐々に聖い者に変えられていきますが、完全な聖さに到達しません。ですから、地上の生涯では成長しつつ、なお神の前に罪を犯し、神の赦しをいただきながら、成長していきます。しかし、栄化は私たちがもはや罪を犯すことのない、完全な聖さを受け、栄光のからだに変えられることです。

パウロは23節で、救われた一人ひとりが聖化の恵みを受けて聖い者に変えられていき、やがて主の再臨の時には完全に聖なる者とされるようにと祈っているのです。ですから23節後半では主の再臨に言及して祈っています。「23bあなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。」パウロは3:13でも同様の祈りをしています。「そして、あなたがたの心を強めて、私たちの主イエスがご自分の聖徒たちとともに来られる時に、私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのないものとしてくださいますように。アーメン。」

主イエスの再臨の時は、最後の審判の時です。その時、イエスの救いにあずかる者は、聖であり、責められるところのないものとして神の前に出ることができるのです。なぜなら、イエスがすでに私たちのすべての罪を負い、神のさばきを十字架で身代わりに受けてくださったからです。イエスが私たちのすべての罪を贖ってくださったので、私たちは神のさばきを受けることなく、むしろ救いの完成である栄化の恵みを受け、新しい神の御国にイエスとともに凱旋することができるのです。なんと幸いなことでしょうか。そして24節でパウロは、神は真実なお方なので、私たちに救いの完成を与えてくださると念を押して教えました。「24あなたがたを召された方は真実ですから、そのようにしてくださいます。」神は私たちをキリストの救いの中に招き、選び、召してくださいました。私たちを召された神は、私たちの救いを完成させてくださる神でもあるのです。（ピリピ1:6あなたがたの間でよい働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信しています。）

また、ここで確認したいのが、パウロが「あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが」と言っていることです。この表現は人間とは何かを3つの部分に分けて語っています。霊は神と交わることのできる部分です。これは他の動物にはなく人間だけが持っている永遠の神を求める霊的部分です。たましいは人格的な部分で知識、感情、意思を持つ精神的な部分です。そして、からだは肉体の物質的な部分です。聖書の他の箇所でからだとたましい、或いはからだと霊というように2つに分けている場合は、たましいや霊に霊的部分と精神的部分の両方を含めています。私たちの霊、たましい、からだは、互いに密接につながっています。まず私たちは自分の意思でイエスを救い主と信じます。そうすると私たちの霊は神との交わりを持つようになります。すると私たちの人格とからだのすべてをもって、神の栄光を現す人生が始まります。そして、やがて私たちの霊、たましい、からだのすべてが救いの完成を受け、栄化されるのです。真実な神がそうしてくださるのです。この救いの恵みを感謝し、私たちの霊、たましい、からだのすべてをもって神の栄光を現していきましょう。

２．教会の交わり ２５－２７

第２の点はパウロの勧めの部分です。ここでは手紙を閉じるにあたり3つのことを勧めています。そしてこれらの勧めは教会の交わりとはどのようなものかを教えています。一つは祈りの要請です。「25兄弟たち、私たちのためにも祈ってください。」パウロはテサロニケの兄弟姉妹のために祈っていました。手紙の最後にも、彼らの成長と救いの完成を祈りました。そしてその後で私たちのためにも祈ってほしいと願いました。「私たちのために」と言っていますが、この時コリントにいるパウロのもとにシラス(シルワノ)とテモテそしてルカもいました。さらにアキラとプリスキラが加わりました。パウロはチーム伝道をしていたのです。このコリント伝道にたずさわる「私たちのために」祈ってほしいと伝えたのです。「絶えず祈りなさい」と教えた祈りの中にパウロたちのためのとりなしも入れてほしいという願いです。教会の交わりは互いに祈り合う交わりです。そしてこの祈りこそ伝道の前進のために必要なのです。ビリー・グラハムは伝道に必要なものは第1に祈り第2に祈り第3に祈りと言いました。パウロはそのことを知っていたので「私たちのためにも祈ってください」と祈りを要請しました。私たちも互いに祈り合う交わりを築きましょう。そして福音を伝えていきましょう。

二つ目は挨拶の勧めです。「26すべての兄弟たちに、聖なる口づけをもってあいさつをしなさい。」今日も頬合わせてあいさつする習慣を持つ国々がありますが、ローマ帝国の人々も頬を合わせてあいさつしていました。パウロは当時の通常の習慣を用い、主の日の礼拝に集まる時に、聖徒としてふさわしい挨拶を互いにしなさいと教えました。挨拶の方法は国や文化によってまちまちですが、クリスチャンは神の家族として、兄弟姉妹同士で挨拶することが教会の交わりにふさわしいのです。挨拶はその人のことを覚えていますという表現です。礼拝に来た人全員と挨拶することは難しいですが、ひとりでも数人でも短い挨拶であっても誰かに挨拶し、あなたのことを覚えていますと伝えましょう。そこから教会の交わりは深められていきます。

3つ目はこの手紙を教会で読むようにという命令です。これは勧めではなく命令という形をとっています。「27この手紙をすべての兄弟たちに読んで聞かせるよう、私は主によって堅く命じます。」脚注を見ると「主によって堅く命じます」の直訳は「あなたがたに主を指して誓わせます」とあり、この手紙をみなに読んで聞かせることは、教会にとって非常に重要なことであることがわかります。パウロはできれば直接テサロニケに行って教えたかったのですが、それができなかったのでこの手紙に書いて送りました。それゆえ、パウロは主の日の礼拝に兄弟姉妹が教会に集まった時に、この手紙を読んで聞かせるように命じました。当時はまだ新約聖書が完成していませんので、教会の礼拝では旧約聖書が読まれ、主イエスの福音を解き明かす説教が行われました。その礼拝でパウロの手紙が読まれたことは、パウロの教えを神の教えとして聞くようにということです。それはやがてパウロの手紙が新約聖書に入れられることにつながったのです。教会の交わりの土台には神の言葉があります。神の言葉が読まれ、解き明かされ、神の言葉に聞き従うことが教会の交わりの中心です。

今日も礼拝の中で聖書が読まれ、みことばを解き明かす説教がなされます。これは教会が教会であるためにどうしても必要なことです。みことばによって私たちは神を知り、神のみこころを知って、神を礼拝します。またみことばによってキリストのからだなる教会を建て上げていきます。そしてみことばによって私たちは霊の糧をいただき、みことばに従って生きる一週間に遣わされます。聖書を土台とし、聖書を中心とした教会を形成していきましょう。

３．主イエスの恵み ２８

手紙の最後は祝祷です。「28私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたとともにありますように。」手紙の初めも「恵みと平安があなたがたにありますように」とテサロニケの兄弟姉妹のために神の祝福を祈っています。そして手紙の最後にも、「恵みがあなたがたとともにありますように」と祝福の祈りをもって終えています。恵みとは受けるに値しない者が一方的に神から受ける神の愛のプレゼントです。それはキリストを通して私たちに与えられます。「私たちの主イエス・キリスト」とあります。神の恵みは、イエス・キリストを私の主と信じる信仰によってのみ与えられるのです。恵みは私たちの努力や働きに対する報酬ではなく、ただイエスを私の神、私の主、私の救い主と信じる信仰によって、値なしに神からのプレゼントとして与えられます。

私たちの救いは、最初から完成に至るまですべて神の恵みです。エペソ2:8「この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。」私たちは自分の意思でイエスを救い主と信じて救われました。しかし、この信仰も神の恵みの賜物なのです。また私たちがクリスチャンとして成長していく聖化も主イエスにある神の恵みです。（Ⅰペテロ3:18私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。）日々みことばをいただき、祈り、喜びと感謝をもって生きていくことは、神の恵みです。その恵みによって私たちは成長し、聖なる者と変えられていくのです。そして最後の救いの完成の栄化も一方的な神の恵みです。主イエスが再臨される時、私たちの霊、たましい、からだのすべてが栄化され、栄光の姿に恵みによって変えられて、天に凱旋するのです。パウロはこの手紙で教え、勧め、命じたことはすべて神の恵みによって可能となることを覚え、主イエスにある神の恵みがあるようにと祈ったのです。

私たちも、主イエスを信じて救われた神の恵み、恵みによる成長、そして恵みによる救いの完成があることを感謝しつつ、主イエスの恵みによって信仰の道を歩み続けましょう。